

光 明 主 義 玄 義

(ワイド増訂版)

仏陀禪那弁栄聖者著

光 明 会 本 部

凡 例

一、本書は田中木又先生編集の弁栄聖者「光明大系」等の御遺文集を底本として、更に御真筆ある時はこれと校合して謹訂を加えた。

一、本文中特に解釈に必要な語句等は最小限度の脚註を施し、更に説明を要する所は☆印を付して巻末に補註を試みた。

一、難解な文字と思われるものには振り仮名を付し、又片仮名は平仮名にした。

一、漢字は原則として当用漢字を用い、現代仮名遣いによったが、送り仮名は聖者御使用の慣例に従った。

一、誤植又は脱字があると推定される個所は、適当に訂正と語句を補い、「〔 〕」印を付してその責任を明らかにした。

一、「ミオヤの光」の巻、頁はすべて「ミオヤの光（縮刷版）全四巻」のもの、「光明大系」の頁は、すべて平成二年光明会本部出版のもの。

目次

凡 例.....

光明主義玄義.....

十八願心理的研究玄談.....一

念仏三昧向果玄談.....一三

念仏三昧向位.....一五

仏陀三昧教阿弥陀宗玄義.....二五

如来光明讃の頌.....三七

諸教の精要.....四六

諸教の大観.....四六

諸教の宗趣.....五一

玄 義.....五四

光明主義の安心三要領.....五七

一、所帰の本尊.....五七

二、所求の目的.....六五

三、所修の行法……………七一

開闡法門……………七一

如来の靈徳を密かに開くの命を奉ず……………七八

光明主義にあらずば何によつてか救われん……………八一

仏陀禪那は光明主義の予言者である……………八四

光明会趣意書……………八七

光明会趣意書……………九〇

如来光明会の趣意……………九一

光明主義要文……………九六

補註……………一一一

弁栄聖者略伝……………一一五

あとがき……………一二七

光明主義の宗要に就いての返簡／光明主義の主要特徴……………一二七

光明主義の宗要に就いての返簡……………一二九

光明主義の主要特徴……………一二九

ワイド版のあとがき……………一二九

光明主義玄義

小乗教の朴質なる意識より進み来りし大乘仏教は最も理想高遠にして幽言深邃なる豐饒しんすいほうじょうなる宗教意識なれば、現実世界を超越したる精神界の内容即ち觀念世界の方面のみを示せり。故に其所説の要素は概して三昧定中の内面を説明したるものにして、其内容を窺わんとするには三昧に入て觀念世界に通入するに非ざれば其本質立義に悟達すること能わざるは大乘仏教の特質なり。

(中略) 故にすべての大乘仏教に教うる処の常住現在の仏陀に接せんには、仏智見を開示せざれば其本質意義に達入するなし。故に大乘仏教の眞実内容を識しらんと欲せば須らく精神の内容に入るべき三昧によらざるべからず。

十八願心理的研究^(一) 玄談

序 論

通じて宗教意義を論ず

通じて宗教は神人合一、大小二我の調和にありと。又云う神人不離の關係する処にありと。又神の救済を被るにありと。

甲は形式主義にて宇宙全体の大心靈が即神にて、人は其一小〔部分〕心である。一小分子が全〔体〕と本来合一すべき性能存するを知らず、自我を認むるを迷とす。大我と合一する親密の關係を為すを宗教とす。

乙は神は太陽の如く靈界の大靈日にして、衆生心は無明罪惡態^{むみょう}である。靈的太陽に摂取同化せられ、永遠の救済を蒙るを宗教とす。

(一) 經論を講ずるに當り、先ず文前に於て一經の深義を分別するのをいう。玄義に同じ。又總じて仏教の玄理を論じたものに名づける。☆

甲乙其趣を異にするも所帰は同一。何にしても宗教は主体と客体との關係にあり。客体は宇宙全一の表現にして、主体は一分の衆生心。

絶対無規定と相待規定せらるゝ衆生との別あり。衆生は因縁に規定せらる。生滅變易。客体は絶対無規〔定〕、円満眞実、相待規定せられたる生死を超えて絶対永遠に帰入するには客体の神の恩寵に依らざる可らず。是に宗教あり。

所帰、所求、去行を決定した意識を安心と云う。

客体—所帰の尊体

宗教の客体通じて神と云う。今最高等なる宗教的神、如来又アミダと為す。

弥陀に三あり。

一、実体としての弥陀。二、宗義学客体としての弥陀。三、心

(一) 光明主義の所帰の尊体—客体は法身の中心であるが、その報身であるが、その報身はその体大法身無量光だけが絶対無規定円満眞実なのではなく、その相好光明大靈力も亦その通り。三身四智十力四無畏等の内証の功德と相好光明說法利生の外用の功德の全体が絶対無規定円満眞実である。

(二) 實在論、存在論より見て從來にない最高最深の意味で聖者は使用された。

(三) 聖者が初めてご自身の三身四智の三昧（開示悟入の人の位）體驗上

行所歸の弥陀。

(四) 『談義』に他力の実体と化用^{けゆう}。

一、実体としての弥陀

『談義』に、他力^ニ実体^{ハニテ}。凡^ニ聖淨二門^{ハニテ}共^ニ以^テ真如実相^ヲ為^ス其^ノ体^ト。故前聖道門^ニ所^レ明^ス、無塵法界^ニ凡^ニ聖^ニ齋^ニ田^ニ之^ニ理^ニ、恒沙功德^ニ寂^ニ用^ニ湛^ニ然^ニ之^ニ性^ニ、即是他力^ニ実体^ニ。五智之中^ニ、仏智者、即指^ス此^ノ理^ヲ也。

実体名称。宇宙の本体を哲学語に実体又真如、法性、第一義諦等種々異名あり。是宇宙の実体を表象するの異称に外ならず。

『(首)楞嚴(經)』には如来藏妙真如性と名く。若^シ〔しくは〕宗教() 法身如来藏性と云う。密教には金胎不二の毘盧舍那^{びるしやな}と号す。同体の異名。今は弥陀の法身^{ほつしん}と為す。

法身——金剛

如来藏——胎藏

より教示下さつた本より絶対円満な相好光明大靈力を持つておられる絶対者、自然界と心靈界の全面の根本仏、法身の中心である三身即一本有無作の内的目的論的広義の報身仏。

(四) 大原談義聞書鈔・法然上人述聖覚法印撰と伝う。

二、宗義学形而上客体としての弥陀

実体論には宇宙全体通じて如来の実体と為す。宗教の要求する神即全体の中に、根本と、中心と、終局と無かる可らず。此中心主宰を得ざれば宗教立つべからず。

独　　尊

宗教は絶対的独一の神尊の存在を信じ之に帰命信賴す。

独尊の存在。人身に自我、国家の帝王、天体の太陽の如く、宇宙全体唯一独尊。宗教は宇宙大我と小我との合一にあり。若此中心を得ざれば全体得難し。国と国との戦争にも中央政府を的として中心を得れば全部歸す。仏教汎神教にも一切諸仏の根本的中心的独尊を立つ。^(一) 經に無量寿〔仏〕威神光明最尊第一。

若し此根本中心大威神者に帰命信順せざれば諸仏の位置に至る能わず。

(一) 無量寿經卷上に出る。

「此の所は釈尊が超在一神の汎神教をお説きになったのだ」と聖者は言われた。

(二) 教相十八通卷上・聖門上人撰

『談義』に、淨土中極樂為^{ノニハヲシ}最^ト。諸仏中彌陀為^{ノニハヲス}本^ト。彼仏是淨仏
国土主、諸仏慈悲之^{ナリ}体。

(二) 『十八通』に、阿彌陀実には無量と、無量名、体、義、用、智、
光、定、通、形、色、相、貌、身、寿所有一切事成就、故云三無
量仏^ト。松柏杉楨阿彌陀名体を離るゝことなし。……一切〔阿〕
彌陀の相貌、五千余卷、是阿彌陀、三世諸仏皆阿彌陀。

(三) 『楞伽(經)』に、十方仏刹中衆生菩薩等、所有法報応身及變化
身皆無量壽極樂界中出^ハ。

(四) 天台。彌陀を念ずれば一切諸仏を念ず。故〔に〕阿彌陀を以て
法門の主とす。

(密教大日等は斯尊の異称に外ならず。) 右は形而上宇宙唯一
独尊彌陀に有ることを明す。

〔三、心行所歸の彌陀〕

(三) 「玄義」には諸処に從來の經論
釈を引用して理想
的啓示(開示悟入
の悟の位)より脱
く表現形式を聖者
は採つていられる
が、それは入の位
で合一した絶対中
心の報身をその本
体の法身より説か
れたものと深く解
するものが正しい見
方である。

(四) 中国天台宗の
開祖、隋の智顗。
世に天台大師、智
者大師と称する。
(555? 595?) 著
摩訶止観卷第二の
上に出る。「超在
一神的汎神を正し
く意識したもので
はないが、それ
に進む初門、第一
歩」と戒浄上人は
言われた。

心行門には斯仏を心行の本尊として帰命信賴する時は必ず一切諸仏に歸す。弥陀諸仏の主なればなり。斯尊の外に実は尊なきなり。若無量の諸仏の名あるは弥陀の異号に過ぎず。之に帰命して真実の宗教心は成立す。宗教は自己の頭腦に常住の本尊存在して之に一切時處を撰ばず、己を帰命して奉仕するは安心を得たりと爲す。

玄 談

初、宗教定義二

一、宇宙全一なる神と自己との合一（大我小我調和）

二、宇宙中心真髓なる神と自己の中心

大靈の至純靈相の神の光明に、大心靈界の太陽の光明に
攝取靈化せらるゝ信仰。

二、宗教発達史の三階

自然教

超然教

(一)
円具教

三、高等なる宗教三流義

一、一神教

二、汎神教

三、超在一神的汎神教（一切衆生仏性と共に統一者を立つ）

四、宗教安心三要領（信仰を立つる三要件）

一、所帰の客体（帰命本尊弥陀如来）

二、所求の依止処（畢竟依属の淨仏国土）

三、去行（現在の位置を去て真如の都に行く心行）

一、仏身論。二、仏土論。三、安心起行論。

(一) 円満具徳教の意で、最高級の宗教をこのように聖者は呼ばれた。現在から永遠に通ずる理想と、これを実現すべき道を説く。完全円満な円具教、光明主義は如来の全人格を憧憬し、又一挙にしてその全徳を頂く道である。

仏身論（之に三）

一、実体として〔の〕弥陀

名—哲学的・宗教的

体質—

唯物、唯心、唯理

絶対大心靈

離言—

超時、超空、一切超絶

依言—

法身（父）金〔剛〕

如来藏（母）胎〔藏〕

二、宗義学の独尊として〔の〕弥陀

独尊—

統攝

歸趣

三、心行本尊として〔の〕弥陀

選択本願の主

歴史的宗教の根柢として

仏土論

絶対的依正仏土（仏土觀）——衆生相待業感の世界依正を超て絶對。

大涅槃——眞実仏土大涅槃界——相待生死を超絶し永恒常住の依處。

極樂

約レ仏——大涅槃界——畢竟如虛空廣大無辺、第一義妙境界。
約レ機——西方十万億土。

一、一レ心、一レ方、一レ境、定ニ安レ心處一。

二、感情上——日夕辺。

三、往昔從來伝説（古来の伝説を依憑するは実地宗教上に欠くべからず）。

四、神秘的。

極樂
—— 仏智所照——無為泥洹ないおん

凡夫所見——十萬億土

『十八通』（上十六）云、言ニ淨土ハ者第一義諦妙境界相次於無為泥洹之道ナリ。

『談義』云、極樂ハ是泥洹無為之界諸仏法王之家ナリ。
同云、諸仏法者以ニ無相泥洹ハ為ニ所期ト。

去行論

去行形而上論——心行論

去^こ行^{ぎやう}の形而上論とは、如来と衆生との關係。衆生本法身より生じて還^また法身に還らざるはな〔し〕。去の形而上は如去の義にて、衆生本真如より出で迷て六道の他郷に彷徨^{さまよ}う、本の真如に去るを終局目的とす。

如来の歸趣即攝取の光に歸順するの義。

『大原談義』云、他力化用者謂密意之上教門也。亦是四智之所成也。極樂不^{シテ}遠^{カラ}構^ヘ二十万億刹之西^ニ、弥陀在^テ己^ニ心^ニ現^ズ一座華台之形^ヲ。不思議智不可称智等者、指^ス此善巧方便^ヲ也。誠以真如界^ニ内^ニ、絶^シ生^{ハシ}仏^ノ仮名^ヲ、平等性中^ノ、無^シ自他差別^一。真如非^{ハズ}自非^{ニシテ}他^ニ、而包^モ自他性^ヲ、故鎮熏^ニ習^{シテ}自他^ニ、令^ム會^セ入^ニ平等性之海^ニ。応^シ知^ル、言^フ自力他力^ト者、此即強弱義也。熏力弱時、則雖^モ冥熏密益^{スト}、而行人^{レバ}不^セ自勵^セ者、不^レ得^ニ道果^ヲ、故云^ニ自力^ト也。熏力強時、諸仏成^{ツテ}外護知識^ト、施^ス増上縁^ヲ、故云^ニ他力^ト也。雖^モ有^{リト}強弱^一、共^ニ

是真如力也。故真如界仏為平等性衆生、可開示一心法界理之處、垢障覆深凡夫、以自力、自己淨體難顯照。故諸仏無極慈悲、哀衆生迷倒、示現法藏發心、發起超世弘願、以易行易修之口稱、令得頓悟頓入之往生。他力之實体爰易顯、弘願之化用忽易成。曇鸞法師約二実相為物之二義、釈如実修行之相。

淨土法は諸仏無極の慈悲を以て無尽法界之上の他力弘願の化用也。然他力大道広弘五乗齊通入。於二円円極極無相無念果上之上、起二無方難思之大用。

念仏三昧向果玄談

一、教之階位 通互宗教三階

一、自然教 多神教 自然的念仏
一体教

二、超然教 一神教 超然的淨土教
一体教

三、円具教 統一兩教—高等精神教 円具的淨土教

二、教之神格

一、一神教 二、汎神教 三、超在一神の汎神教

三、大乘仏教教祖三昧中説

四、本仏と迹仏

五、弥陀〔の〕実体と化用^{けゆう}

弥陀〔の〕実体……絶対大靈（真如） 形而上実体論の要求

弥陀の化用

宇宙最尊の弥陀……形而上有神論の要求

三昧対象の弥陀……実験宗教心の要求

贖罪しよくざい的の弥陀……救済的宗教心の要求

伝承的の弥陀……伝来歴史の要求

神話の弥陀……幼稚なる宗教心の要求

六、教の宗趣

念仏三昧為宗、往生浄土為趣。

見仏往生を宗致とす

見仏二機

一、現身——勝

二、臨終——劣

往生成仏——仏性顕生の生——全生命の顕現——見仏は其兆候

禅の見性成仏と浄の見仏往生

靈性と理性と天性

——「ミオヤの光」宗要の巻 三巻二九〇頁—二九一頁——
——「無対光」一六三頁—一六五頁——

念仏三昧向位

(一)

道諦、七科三十七道品。

四諦は通じて仏教信条。

道諦七科は宗教過程の条件。

心靈生活は大小聖淨にわたつて同一形式。

(一) 四 念 処

色

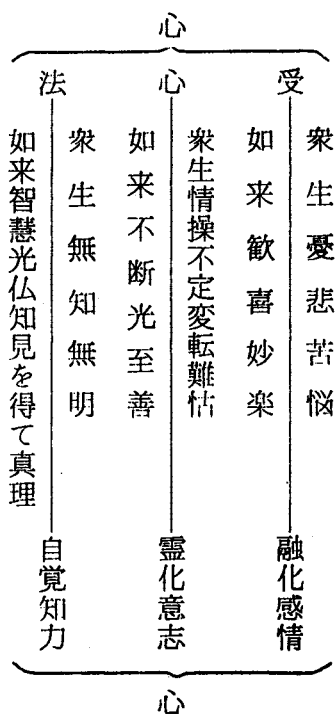
身

衆生身及び六根不淨

如来清淨六根清淨

淨化感覺—身

(一) 三十七道品によつて示される凡ゆる修行方法と各過程で必ず実現しなければならぬ二次的目的とは、認識の一切智によつて円満に合一した広義の報身の自受用身によつて形式と内容の全面、特に内容の面で内的目的論的に統一せられてゐる。この真相を聖者は明了に認識されて私共のために成仏の中心道、直線道としての念弥陀三昧の三十七道品を開顯して下さつたのである。



光明の要と能

染汚 苦惱 無明 罪惡……宗教要

清淨 歡喜 智慧 不斷……宗教能

宗教要 能

清淨……厭穢 欣淨……身及感覺 濟美

歡喜……拔苦 與樂……感情 人生幸福

智慧……転迷 開悟……知 力

人生自覚

不断……廃悪 進善……意 志

人格完成

現在を通じて永遠にまで

(二) 四 正 勤

一 未生惡令不生

二 已生惡令滅

三 未生善令生

四 已生善令長

(三) 四 如 意 足

至心……形式

内容

信(知力)

自己の染汚等を信認す

如来実在と実力を信ず

仰解証

信信信

楽(感情)

自己の染汚等を憎惡す

如来の慈悲智慧円満を愛樂す

母子性的
異性
大小合一的

欲(意志)

自己の非惡を解脱せんと

如来の円満の人格に生れんと

願作仏心
願度生心

(四) 五根 及 (五) 五力

一、信

根、如来に對する信樂欲を以て安心の根を生ぜしむ。

力、正助二業を以て益信力を發達す。

二、精進

根、三心、精進の根、如来を信樂、精密に進趣せんと
の安心。
力、正助二業を以て勇猛に精進して信念發達せんと
の力。

三、念

根、如来を愛慕恋念して捨てず。

力、正助二業常に念じて捨てず益発達。

四、定

根、如来を念じて三昧的に如来と合一せんとの安心。

力、正助二業念仏三昧を以て

五、慧

根、如来を信樂して仄かに曙光を見とむ。

力、

(六) 七覺支—開發位

(七) 八正道—體現位

——「ミオヤの光」応現の巻 四卷二五頁—二六頁—
——「難思光・無称光・超日月光」 九一頁—九四頁——

新月漸々光明増長十四夜に至るを向位とす。

分 道				正 八				一 体現位
正定	正念	正精進	正命		正業	正語	正思	正見
支 覺				七				二 開發位
念	捨	定		輕安	喜	精進	攄法	
慧	定	力		念	五	進	信	三 喚起位
慧	定	根		念	五	進	信	
欲	樂	信	至心	生	增	斷	防	
				未生善	已生善	已生惡	未生惡	
法 心				受 身				
如來智	自己無明	如來不斷	自己無常不定	如來歡喜	自己苦毒	如來清淨	自己不淨	
向位 名号聖種子								

三 味 向 位

念仏三昧万善万行総持。向位道諦七科三十七道品、此道品通大小權実三乗及菩薩宗教生活同一形式、植物生活に例す。

〔初、四念処〕。聖種子。生滅四諦法は声聞の種子、十二因縁は縁覺種子、無上菩提心成仏の種子、弥陀名号成仏の種子、一切生物の種子の如し。弥陀名号種子分析の四要素 1、身、如来清浄光清浄法身乃至六根及一切清浄相好光明等の正因 2、受、歡喜光法喜禅悦受用法楽涅槃四徳常樂の元素 3、心、如来不断光無上菩提道徳の元素 4、法、智慧光無上正覺一切智の元素、斯万徳総持の名号は杉の種子に根茎枝条葉花の性分あるに例す。

〔二〕四正勤。自己の我欲等を犠牲にして靈性を萌発す。防未生惡

断惡已生、增善已生、生善未生。自我は一切惡の統梁念仏心は所有る善

の代表、自我を犠げて念仏心を發揮す稻の果實れて萌生する如し。

〔三〕四如意足。今は一、至心は形式。二、信。三、愛。四、欲内容。至心真実に如来を信じ愛し靈国に生れんとの欲望。一、真実、消極と積極。二、信機、自己汚、苦、無知、罪惡。信法、如来我を常樂我淨に靈化し玉うと。三、愛、自己の凡てを憎み如来を愛樂す。四、欲、願生願作仏願度生の心。

五、〔五根〕。五根と五力已微崩未発根此五法三昧、生仏合一の根を發。一、信、如来心光を我有にせんとの信根。二、精進、勇猛に熱誠に心中の仏子心を發揮せんと。三、念、如来日光の熱を愛念し益靈性の根發せんとす。四、定、如来と合一して離れざらんとの心。五、慧、如来と合一して如来光が自己の光と為て自覺す。

六、五力。根と力とは内の安心を根とし其の働きに依て發達するを力とす。例せば植物の地中の根と地面に現れたる莖枝等と相

関聯する如し。慧に依て信心喚起の覚醒とす。

七、七覺支。心靈の花開く心意状態。1、択法、如来心を択〔み〕簡〔み〕て虚偽雜念を取らず。2、精進、勇猛に念仏三昧発得仏を見んと欲して止まず。3、喜、微かに如来靈に接觸して三昧の喜を感じず。4、輕安、諸雜念なく無我の境に入り身心輕安を覺う。5、定、無我定中仏心と合一して三昧定樂を覺〔ゆ〕。6、捨、初には注意怠るときは仏現前せず。三昧純熟すれば任運に現前、射を習うに〔熟〕するときは無意識に中る如し。7、念、自己の中心が弥陀なれば弥陀より流出する念々悉く仏心と相應。斯に於て三昧発得し心靈開發して仏知見開示、入我々入の妙境に心機革新して新人真仏子と為る。

八、八正道分。三昧結果果の成熟する如し。1、正見、己に仏知見開き仏子の知見如来の聖意を我意とす。故に自ら向う処仏

行にし〔て〕向上の一路なり。 2、正思、正見の心眼を本として思惟する処凡て思想仏心と相応す。 3、正語、聖意を心と為す思想より発表する言語なれば悉く仏意と相応す。 4、正業、思想言語共に仏心たり其身の動作行住坐臥に作す処仏行と相応す。 5、正命、身心の生活悉く仏心仏行、衣食住共に仏の中にあり。 6、正精進、勇猛に奮闘する処仏行ならざるなし。 7、〔正念〕、八億念念悉く〔く〕仏心と相応す。 8、〔正定〕、仏心と合一して常に仏子の行念々に向上し歩々に往進す。

弥陀は靈界〔の〕太陽なり。衆生心は月に例す。月本闇黒日光映じて明と為る。衆生心の晦月如來の光を受けて纖月と現れ漸々に進みて十四夜に至るを向位とす。円満^{みち}盈て欠ることなきを仏果の位とす。

仏陀三昧教阿弥陀宗義(一)玄義

斯教の玄義分を

初に、名。二、体。三、宗。四、目的。(趣致)。五、教相。

名 阿弥陀。総別二名。総阿弥陀。

古来宗教に所依の法体を名づくるに二。一、宗教的名詞。二、
學術語名詞。

一、法身。如来藏性。ビルシヤナ。大日(金胎一体)。アミダ。

真神等。〔宗教的名詞〕

二、真如。法性。涅槃。第一義。真理。妙法等。(學術(的)名詞)

種々無量の名称ありと雖ども同じく所依の実体を表象する名詞
なり。

今宗教的にアミダ亦如来を以て宗教的所依の法体とす。又所依

(一) 幽玄、深妙な義理。天台大師は諸經を釈するのに先ず文前に於て五重の深義を緒論し、玄義と呼んだ。所謂五重玄義とは釈名、弁体、明宗、論用、判教である。

実体に仏と法とあり仏を本尊とする教には仏に依て三世諸仏も正覺を成ずとし、法を本尊とするものは三世諸仏此妙法即ち理法によりて成仏す、此軌持を離れて成仏の理なしと。

同一の実体を甲は擬人的に実体は色心を統一したる絶対心靈即ち如来なりとし、法とは如来の理性に外ならずと。

乙は色心を統一したる実体を理法と名づけ亦真如妙法と名づく、絶対理性を所依として妙法と名づく。

同一の実体を甲は心靈態とし之を如来と名づけ、乙は理体として之を妙法と名づけたるも宗教としては擬人論的に如来と名づけたるを適當とす。

今は甲を取りて如来とす。

如来に総別の名あり。其如来の体相用を詮表するの名称なり。

総にアミダ（三身一如の総称なり）時間に無量寿、空間に無量

光、即ち絶対心靈態の称なり。

別、十二名称。

無量光—体—法身

初三

無辺光—相—般若

如来性能

無碍光—用—解脱

如来自境界

無对光—

終局目的歸処

真仏土即涅槃

炎王光—

消極—解脱の要—人の煩惱

積極—解脱の能—仏性開発

宗教心理 如来の靈〔光〕に依て成じたる心理状態

清浄光—

四面玲瓏

—感覺

六根〔清〕浄

歡喜光 — 融合

安立

— 感情

智慧光 — 啓示 — 智力

不斷光 — 靈化 — 意志

宗教倫理 行儀分

難思光 — 恩寵喚起 — 信仰修養

合一

無称光 — 同 開發

開發

— 同 開發

超日月光 — 同 靈化 — 同 實行

總別 宗教客體如來の性能を詮表し名は体を徴す。名を已に釈す。次に体を明さん。

◎実体 如来実体即ち宗教的〔所依〕の体。

実体に就て古来唯物論者は現実の原理は物理的原子のみと。一

切事物は時間空間の自然律によりて万物発生す、一切生物の心理も原子運動の変化に過ぎずと。故に一元理は唯物なり。

唯心論者は觀念的世界觀の如きは宇宙実体は一大觀念なり、宇宙に目的あり、世界秩序の最終目的は大菩提にして道德至善に〔帰趣〕する理性なりとする如きは觀念論宇宙觀なり。

又三種世界觀。

唯物と唯心と唯理論者なり。

世間唯物論者。又俱舍の法体恒有説。唯識論の唯心説。唯理、実体本質は物心を統一したる理性なれば真如等と名づく。

今は実体は物心を総合したる心靈態として之れを華嚴に総該万有心と名づくと同じ、また永恒自存心靈態と名づく。

心靈態は意識的(一)にあらず、故に物質にも意識にも現じ実体は円融相即して不可離なり、一大心靈を根底とせざる万物なきとすれ

(一) 無意識的、又は
不識的 (英
unconscious,
Unbewusst)
精神態をこう。

ば一切個々の之を實體とす。

『楞嚴』に世界一切因果微塵に至るまで心を以て体とすと云。

◎宗とは一教の極致、主義なり。また通じて云わば宗教の定義なり。宗教の定義は主体と客体の直接なる関係によりて人の心靈を開発し宗教的生活に入る理元なり。天に太陽二なく国に二王なく宗教意識所依の中心点即ち唯一の本尊なり。法華の如くは一大事因縁即ち如来と衆生との感應によりて衆生の仏知見を開示悟入するを宗教とす。

禪に自己が根底絶対主体たる一大理性を発悟し見性を宗とす。

密家は本尊の三輪と行者の三業と三密相応し神秘的に神人合一し神我に加わり我神を持ち此神秘によりて如実に自心を知見するを宗教とす。

今は念仏陀禪那、如来の聖靈と行者の靈とは機能致一にし三昧

相應を宗教とす。

各宗名を異にするも要する処主体の心靈と客体の靈応との交感によりて知見を与え融合し安立してこの關係により實際の宗教人格を革新し更生せしむるの功能あり。故に宗の定義は大我小私の調和、神人合一の点に〔あ〕り。

宗に宗教意識の階級に等多しと雖ども性質に於ては二種に過ぎず。

理性宗と感性宗。甲は能動的に自己の主体の根底たる絶対主体との關係を以て自性を開展する時は自性は仏本煩惱なく無漏聖智本来具備すと意識す。修に依て顯わる、修成にあらず。こは形式動機なり。天台禪等の如きはこれに属す。

感性宗は自己は白紙の如く如來の靈応を感じて始めて靈性成ず。是は内容動機とす。本有の靈性をば裏とし新〔熏〕の靈應よ

り經驗すべき〔聖靈〕を表とし内容動機。淨土部類、キリストの如きは之に属す。

(一)今は理、感、二要素を調和したる。禪、淨、統一せる宗教。

理の念仏、理性、絶対主体を開発す。事の念仏、感性、内容動機。事相念仏相待。自己は罪惡。如来の恩寵によりて解脱す。

(二)理性は本有にして法身より先天に賦与せられ、感性は修成、報身の靈応に感應して甲は開發にして乙は解脱靈化なり。是れ完全なる宗教意識なり。

歸趣即ち目的

宗教が生活過程の最終目的とする処は往生淨土にあり。往生と成仏と名異義同じ。即ち更生。更生とは天然の生活を化して如来の交感によりて如来の目的に協力し即ち自己の最終目的なり。

神人合一の靈能によりて理性開發して自性天真顯示し感性靈化し

(一)法身の中心である広義の報身が大宇宙の一切の根本仏で、その絶対理性と絶対感性が絶対無規定円成実性の真實在で、無量光より超日月光までの十二光の絶対同時の二方面である事實を明示しないで「理性は形式動機、感性は内容動機」、又理性と体大法身、感性と狭義の報身(本書108頁補註(四)参照)とを対応させて「理感二性を調和した完全なる宗教意識」というのみ教えは聖者の方便對機の説で純粹光明主義の立場から嚴密に述べたものではない。

て大我と融合し中に安立し其指導によりて靈的生活活動をなすに至れば之を更生としまた成仏と云。

更生に二種。精神と身体。即ち有余依と無余との二涅槃と相当す。如來の靈應との感應により心機一轉し人格革新靈格としたる有余の身を有しながら理想解脱して心は淨土に棲みあそぶを「有余涅槃と云。」^{ところ}神は涅槃なり已に生死を脱したるなり。

次に如來に協力して靈目的に活動する終に有余の身蟬脱して実在解脱に歸入するを無余涅槃と云。

涅槃は、理に約して常寂光土、事に約して極樂淨土。一体二面。

(三)個人生活、涅槃に歸して、理性は絶対に個人生活を超絶す。感性は解脱靈化の心靈活動の勢力不滅の故に方便法身は個人生活不斷に相續して尽ることなし。

体常恒の故に用もまた随て不滅なり。故に無住処涅槃なり。生

(三) 方便法身に關するこのみ教は從來の淨土教における方便法身即念佛の心本尊としての酬因感果の説は正しくないもの、不完全なものとして選り捨てさせるための聖者の方便對機のものである。

☆

死に住せず涅槃に止らず任運無作に常に化用を施す。無上菩提を証し大涅槃を得るを終局目的とす。

教 相

一切の宗教を通じて三階級とす。原始の宗教より最高等に発達したる迄。

一、自然教。幼稚なる宗教意識に相応せる自然的人類には自然物素の中に神を求め其請求する処また肉体の苦を解脱し幸福主義なり。是に多神教、一神教、汎神教あり。

埃及自然一体教は其総なり。(一)

二、超自然教。自然界を超絶したる靈界に神及神の国を求む。

此に多神教、一神教、汎神教あり。

また超然教に時間的、三祇の後成仏。空間——十万億土、また天上界。

(一) 日本の神道は自然教。
中国の孔孟の教、老莊の教も亦そうである。

浄土方便説 衆生所感を此土とし仏の所感彼岸とす。

三、円具教。初の自然教と超然教とを統一し総合して高等なる意義を以て。精神教。

衆生本有に靈性具備し之を統一するは神なり。一神と汎神を統合し汎神の中に統一せる神あり。無量時間を一念に統一し我を捨て如来に帰入する時は一念に三祇を超ゆ。

娑婆即浄土。相對彼此は機の感見我を捨て如来に帰する時は此に即して十万億土

我を転じて仏慧に依るときは即身成仏。時間に拘わらず空間に問わず唯心清に随て浄土清。

眞実浄土説。阿弥陀仏去^ル此^{コトヲ}不^{カラ}遠^{ズル}浄業成者即於^{ハチテ}此^ニ即觀^{チン}。

世界觀。娑婆即寂光。去此不遠。此土を去らずして心靈開發し法眼開く所にミダ現前し極樂顯現す。

一仏土統^フ一切世界^ヲ。一觀念界統^フ一切感覺界^ヲ。

一仏統^フニ一切仏^ブ。弥陀即一切諸仏。本体と迹仏。

円具教は唯汎神教と一神教との調和にして汎神に統一せる一神なり。是最も完全たる宗教観なり。

教相即ち学説と成立宗教の区別

宗教形而上論は如来の本質性能を論究す。一切の理論的宗教哲学とも発達^{ハツク}の程度同等なる時は何にも調和せざるべからず。真理一なればなり、唯所見を異にするのみ。

吾人が学説は宗教進化主義なり。

科学と調和しすべての進化せる宗教と致一せざるべからず。

聖浄二門は学説と実行にして、浄土の学説なり。

禅浄は実行的なれども自力他力と云よりは精神宗教にして理性主義と感性主義となり、形式と内容となり。

(一) 今は理感二義を調和したる高等の宗教的教相なり。

——「ミオヤの光」玄義の巻 一巻二五八頁—二六一頁——

(一) 「絶対理性と絶対感性が円満に融合統一調和してゐる広義の報身論並に見仏論」が聖者正真の真精神としての光明主義教法の説相である。

(二) ミオヤの無量光より超日月光の

(二) 如来光明讃の頌

(三) 無量光(体大)

帰命無量光寿尊

一身乃至十仏身

独尊統攝歸趣にまし

偏依の依なる円実性

物心無碍超時空

万物内存心靈態

内に無尽の徳を具し

自然心靈界を為す

生産門には法身の

一切知能は天則の

因縁因果の律として

世界と衆生を生成す

摂取門には報応の

二身を現じて十方の

衆生を摂取し教化して

菩提涅槃に帰趣せしむ

(五) 無辺光(相大)

絶対観より主客為し

個体は衆生の阿頼耶なり

十二の光明の全面を通じて、法身の中心である三身即一の広義の報身仏が宇宙最高の真実在として独立自存しておる大宇宙の絶対中心で、自然の根本仏に在ます事実に讃歎する頌である。

(三) 体大法身無量光の独尊統攝歸趣と言われる面を通じて、法身無量光の中心である広義の報身仏が宇宙最上の根本仏、一切の真理の法則の最高の尊の統一者に在ます事実に讃歎するものである。從來と同じ様に、体大法身無量光を一切の真理法則の最高の統一者と認めるのではない。

(四) ☆
(五) ☆

十方三世の色心しきしんは

如来の鏡智に炳現へいげんす

一大理系の枝葉なる

個性の自治を末那まなとはす

如来は全てを自我として

平等性智すべにて統る

体用相即相入の

識智は一即一切の

重々無尽の交渉に

知見を与うは妙智なり

五識五塵ごつしきは業識の

衆生の所感じようしよさちは異なれど

仏慧の勝妙五塵をば

成所作智じようしよさちの作用なり

(一) 無 碍 光 (用大)

法身一切智と能の

大道自然に行われ

万物よろづを摂おさめて養うと

天命天恵けいとは言わめ

報身無碍げの光明は

十方摂化せつけの聖意なる

本願不思議の力にて

衆生を解脱し自由とす

神聖無上の命令は

道德律の光にて

(一) 法身の中心である広義の報身の用大である。故に自然心體二界の全面の用大であるから、無碍光を応身、用大と見るのは光明主義上誤りである。然し、広義の報身の本体は、大宇宙の一切の体大、法身であるから、広義の報身の十二光の中の無碍光をば弁榮聖者は法身、体大と言われた。

正義は撰善捨惡にて
恩寵めぐみは三縁の慈悲をもて
斯の三徳の靈力ちからにて

至善に向いて進ましむ
聖子みこら等の靈はぐを育みます
便すなわち仏道成ぜしむ

無 対 光 (衆生成仏)

聖意せいいに背きて顛倒の
摂取同化おわりの終局には
無対は如來の自境界

(二) 衆生は闇に惑いしも
彼此を絶して無対とす
始本不二の覺位にて

十仏三身具わりて

亦身心土不二と為る

極樂無為涅槃城

寂光華藏密嚴土じやくこうけぞうみつごんど

同体異名いみようは智と情と

譬喩と密語に号なづくなり

絶對無比の妙境は

便すなわち諸仏の住所にて

無住涅槃ましに在ありて

常恒度生としようは自然なり

(二) 三身四智の仏
眼で合一した法身
の中心である広義
の報身の絶對眞実
圓滿な妙色相好身
は、能動的に相對
因縁因果の無限の
変化をしながら、
本来迷悟生仏の假
名を絶し、あらゆる
彼此の相對因縁
因果を離れて絶對
不變で常に同一の
絶對的の妙色莊嚴
身である。この妙
色莊嚴身の彼此を
絶した面を「彼此
を絶して無對と
す」と言つておら
れる。☆

炎王光（除一切障）

炎王光の靈能は

すべて一切の感障除くなり

理惑は無明と十見と

塵沙の理智を障る性

事惑は生理と本能の

衆生俱生の垢質なり

亦是病的惡弊症

団体瘴氣は同共罪

行不は衆生の性格を

三聚に類を分つべし

聖意に背くは邪定にて

天然非靈は不定なり

聖意に協う心靈は

正定聚の員に入り

二惑の雲霧はれぬれば

理事の靈性顯わるれ

清淨光（感覺美化）

我等が五根は塵境に

まびれて常に汚さるゝ

感覺欲は亢進し

習慣ついに病為す

清淨光に浴すれば
内に靈光感じなば
此身は塵に交るも
五妙感なる靈境に
五根に各五位ありて
法慧仏とは靈界の

根識清く滌すすかるゝ
姿色も自ずと潤うるおるれ
神は清き光にて
逍遙として栖遊すみあそぶ
肉と天とは自然界
勝妙五塵を感じなれ

歆 喜 光（感情融化）

有為の世に処し幸福さいわいを
世は内外うちそとに苦惱くるしみと
解脱は己が任まかならず
神秘融合最妙いとたえに
眞実勝妙ちやく樂を得て

求めば八苦身せまに逼る
罪と咎とがとに充滿みちみてり
如来の大我みおやに帰命なせば
恩寵めぐみの中に安住す
法喜禅悦極みなく

人天自然の歎樂と

二乗の真空無為の樂

菩薩の他受法樂と

仏陀の自受法樂は

如来歡喜の光明が

随類受用じゆゆうに外ならじ

智 慧 光（仏知見開悟）

聖旨みむねに背きて無明やみとなり

妄想顛倒なる物の

識知争いかでか絶対の

如来の妙境測りえん

如来の知見被こうむれば

依正二報えしやうの莊嚴相しょうごんそう

智悲内包しょうとくの聖徳と

法身理想の相を觀みん

三昧智慧陀羅尼だらに等

一切の仏法悟らるれ

人の常識学習智

天才自然の発明智

二乗出世の真空智

菩薩の道種智等より

唯仏ゆいぶつ与よ仏ぶつの種智ゆづよぶつまで

皆智慧光の所現なり

不斷光（意志靈化）

世界動機と主我の意は

六道輪廻りんねの業わざを為す

斯光しこうは衆生を正善に

靈化ぼだいし菩提に進ましむ

如來の三徳加われば

自ずと廢惡進善し

無上の道心おこ発しなば

願作がんさぶつ仏と度生心としようしん

聖き意きよみねに靈化して

普賢ふげんの願行成就せん

道徳五重の動機あり

人天二道の徳よりも

二乗の自利菩薩利他

仏陀無上の道徳は

如來の阿耨菩提あおくなる

不斷の光に縁よればなり

難思光（喚起位）

仏性宿因を素地と為し

名号聖種しょうしゅもんくんの聞熏に

智識教化けの勝縁と

思修もしうに信念萌発す

至心信樂欲生はしんぎようよくしやう

くぎよう

恭敬無余間長時けんじようじ（修）

誦誦礼拝觀察とどくじゆらいはい

五種正行の法をもて

渴仰熱誠いや昂たかく

恩寵喚起の時到り

召換に報う子の心まねき

正進排雜神足行しやうしんはいざうじんそくぎよう

称名讚歎供養との

靈を養う資糧かてとはす

信念五根に力を得

心靈覺醒さむれば信満位

無称光（開發位）

瞳あくれば自己の見と思の

三昧凝神ぎやうしんに妄想と

開發に隨信隨法は

七覺三昧に花開き

神秘融合不思議にて

非惡の深きを自覺せん

業障重ごうしやうきに苦悶もだゆなれ

如来の中に我を投じ

三種の知見示されん

入我々入の奥邃ふかし

歡喜極きわなく覺きおえて
此時情操こころ轉換し
聖子の数に入ぬれば

真我の中に安住す
靈きよき我とは更生よみがえり
便すなわち靈格備わりぬ

超日月光（体现位）

智悲は靈界みむねの日月ひつきにて
作仏度生の願行に
内外ないげ兩魔の健闘は
三徳の光の照護にて
已に靈果の熟すれば
聖意みむねを弘く世に敷いて
仏子仏心仏行の
同一無量光寿なる

聖子みこを養みおやう父母なり
菩提の心じょうようを長養す
靈こころを琢磨みがく器にて
自律謝徳の金剛心
聖種みただねを有縁うえんに分播し
衆靈養ひとをう大地なり
果位は無上正覺の
涅槃の樂土に歸するなり

(一) 諸教の精要

諸教の大観

帰命無量光明尊

常恒^{じようごう}普遍の妙法と

我^る今^ふ流布せる教法と

聖意^{みむね}に^{かな}応^あわしめん^を為^をめ

宗教種類多けれど

絶対至尊を認めては

主体の心に生と理と

客体観も多容にて

(二) 自然と超然円具とは

自然に多神と一体と

分身十方三世仏

及び一切賢聖等^{げんじよう}

己^{しんげ}が信解の説をのぶ

仏力加被^{かび}を垂れ給え

一切^{すべて}に通ずる定義あり

最終希望を満たすにぞ

霊との三我^がに等^{とう}あれば

教を三階位に分つ

随類応機の教なり

日月山河樹林等

(一) これは新しい酒を古い革袋に入れた表現形式で、光明主義に関する部分は所謂一往の義であるから、深く文底に潜んだ密意——「法身」の中心である報身を根本仏と仰ぐ絶対理性と絶対感性の二性を全うした円満な「光明主義」の再往の義を明かにする必要がある。

(二) 自然教＝現世教

自然の物素に神を認^みて

一体教には自然なる

自然元氣に稟^うけし身は

(三) 超然教に一神と

(四) 神は最高天に在^まし

天地万物ことごとく

神に犯^{おや}し祖の罪

神の示^{おきて}しの戒律をば

(五) 一切を憐む慈父の愛

信愛するもの無終なる

(六) [婆]羅門天は絶対^{ばらもんてん}に

冥^{くら}きにさまよう迷子は

天父に冥合^{めいごう}する時は

生我の幸福^{さち}を求むなり

宇宙全体神^{かみ}とはす

終^{つい}に自然に帰るなり

一体教との二つあり

自然界に超越す

神の聖意^{みね}に造化^{つく}らるゝ

子孫は獄火に焼かるべし

守らば死後に救われん

一子に罪を代らしむ

天に生るゝ基教^{ききょう}なり

宇宙に超在したまえり

幻夢^{げんむ}の生死^{しやうじ}に苦をぞ受く

超在界に帰入せん

(三) 超自然教
(四) ユダヤ教

(五) キリスト教

(六) 婆羅門教

(一) 彼かしこに到らばことごとく

衆生の業感より成れる

報仏所感の淨界に

(二) 阿頼耶所變の衆生界

転依てんねの菩提涅槃をば

前は空間こゝ此処かしこ

すべて自然と靈界は

(三) 円具は前の兩界を

一切すべてに神性具うれば

万有神と万有に

宇宙全体神かみなれば

(四) 台家は同居方便土

唯だ仏のみ法身が

永遠涅槃に帰するなれ

輪廻えんりの苦界厭離えんりして

生しょうねがを欣よろこうは淨土門

生死は惑業より造る

三祇ぎに期するは相家そうけなり

後のちは時間じかんに因と果の

超然として隔つなり

統合あわして神の中とはす

汎神教と名づくなり

統一超然神しんとなり

衆生も神の分子なり

報土は業の所感にて

常寂光土にいますとぞ

(一) 淨土門

(二) 法相宗

(三) 円具教

(四) 天台宗

衆生の心に三千の

世間相即円融し

三千在理を衆生とし

三千果成かじょうを仏陀とす

(五) 華嚴は全宇華藏界

森羅万象しんらばんしょう十仏身

法界縁起の方法は

融して相即相入し

理事と事々とは無碍にして

主伴重々無尽なり

念劫円融自在にて

生仏因果同時なり

(六) 密家は六大毘盧びるの身が

随縁三千四法身

万有互に主伴為し

重々無碍に相関す

一大毘盧の分子たる

衆生は理智の大日仏

各自の曼荼まんだ開くれば

毘盧密嚴みつごんは顕みわるれ

(七) 禅には三界唯一心

一切万差じや是真性

浄土と穢土へだての隔なく

衆生と仏と二つなし

断つべき煩惱なきものを

菩提を証する要やある

(五) 華嚴宗

(六) 真言宗

(七) 禅宗

(一) 厭^{いと}う生死もあらざれば

(二) 是等は何れも高遠に

(三) 内觀理想に傾きて

(四) 斯教^{しきよう}は汎神超在の

(五) 神は實在円実性

展して相對世界性

因縁性より三展し

極小各部の伏能は

生物^す向上^すみて人類の

(六) 神は自性終局の

報応二身を示しては

遠求二心は神人の

光明摂化の終局は

欣^{ねが}う涅槃も更に無し

美妙^みを究め^{きわ}め尽せども

客觀^{よく}を疎^{うとん}する嫌^{きら}あり

一体神を信認す

屬性一切智能より

十方三世に相關し

個々差別の衆生性

全部と共に進行し

理靈の二性と自発せり

心靈界に摂せんと

帰趣の理性を顕わせり

因縁力の理法にて

本始不二とは成りぬべし

(一) 上述の天台、華嚴、真言、禪の四箇大乘は円具教中の汎神教である。

(二) ☆

(三) 光明主義は超在一神の汎神の円具教である。

(四)(五) この神は宇宙全一獨立自存の絶對的現象體で、超在一神の汎神の根本仏に在ます広義の報身。

(六) 広義の報身より報応二身を内的目的論的能動的に示現して帰趣の理性を顕わされたのだから、この報応の報は浄土の御主公としての狭義の報身。

諸教の宗趣

宗とは神人交感の
宗教心理の中心点

趣とは救霊更生の
宗教倫理の終局なり

如来の中に我を投じ
生仏合一するところ

開展靈化の功を成し
光明中の人となる

自然教にて降神は
生我に靈を交感す

神の啓示を蒙りて
斯願満足得らるなり

(六) 超然教には超絶の
神の聖靈感じては

聖旨みむねを示され罪ほろび
聖きよき人とは更生す

(七) 念仏三昧宗と為し
生仏感応する時は

業事ごうじじょうべん成弁功成りて
往生浄土に定まりぬ

(八) 如来出世の因縁は
衆生に具する仏知見

開示し悟入せしめては
仏の正道しょうどう行ぜしむ

(六) 通じては超自然
教、別してはユダ
ヤ教、キリスト教

(七) 浄土宗、真宗

(八) 日蓮宗

(一) 一念三千三觀を

即凡見仏功成りて

(二) 華嚴三昧に法界の

けんもんげきよう
見聞解行証人の

(三) 自心の曼荼三平等

まんだ
理具と加持と顕得の

(四) 直に自心の性を見て

任運自在に解脱して

(五) 今は念仏三昧に

信念喚起開発し

聖旨を己が心とし

おうせ
命のつとめを果しては

宗教種類多けれど

四種三昧に行道し

そくじよう
六即成は台家なり

観には理事の無碍を得て

三生覺位は華嚴とぞ

ぎよう
三密体宗行と為し

三生仏位は秘密宗

無相無念を宗とはし

さ
自然作仏は禪那なり

(六) 己れを弥陀に投じては

心霊更生期するなり

光明中の人となり

眞実報土に帰るなれ

(七) 通じて二性に分つべし

(一) 天台宗

(二) 華嚴宗

(三) 眞言宗

(四) 禪宗

(五) 光明主義

(六) 本書五〇頁の
脚註(四五)を参照。

(七) 理性宗と感性宗

(八) 理感二性は能と所の

(九) 理性は形式動機にて

感性内容動機にて

前は自性の天真を

後は絶対我を投じ

(三) 今は二性を綜合し

恩寵に感性充されて

願はくば我同胞等

同じく聖意を体しては

二動の動機によればなり

先天自性を開くなり

後天恩寵を受くるとぞ

開悟し解脱を宗とせり

救霊の力を仰ぐなり

天真自性を開きつゝ

開発靈化を期するなれ

一切と恩寵を被りて

共に安寧に到らなむ

(八九) 本書三二

頁の脚註(一)及び

同三六頁の脚註(一)を参照。

——「ミオヤの光」玄義の巻 一巻二五四頁—二五八頁——
——「道詠集」 四二〇頁—四三九頁——

玄義

弥陀の玄義とは絶対界全宇宙最深の玄義なり。世界観、人生観の根拠にして、古来幾多の哲学者の頭脳を煩わしたる玄理にして、此世界観に或は器械的に物質の流動力と見、或は唯心の一元理の本質勢力なりと。或は不識精神態なりと。

弥陀教義の玄義も世界人生観の最終の基礎より研究するに非ざれば其玄理を〔銓〕^{はか}り其秘密の蘊奥^{うん}を究むることを能わず。仏教哲学に於ては、古来俱舎の物心二元論、唯識の唯心一元論、天台の中道的唯心等、其論漸次に発達せり。圭峰の『原人論』^(一)の如きは甚だ簡なりと雖ども原人の進化説の一斑を識るに便なり。彼に依れば世界及人生の最終基礎は、或は大道元氣太極等の支那儒教道教は天然界を基礎として、超天然に宇宙の玄理を究めざるが故

(一) 中國華嚴宗第五祖、唐の宗密禪師(780~841)の稱。その著「原人論」はその名は韓愈の「原人」の一篇に似ているが、内容は大いに異なる。

に、本より宇宙の本体及び性能を究めたるものに非ず。仏教に入
て原始仏教には世界及び人類は衆生の羯磨(二)かつまを本とす。世界は衆生

(二)梵語カルマン
karma の
音写。業と訳す。

の共同業力の所感、個人は個人特殊の業力の所感なりと。業力を
基礎として其本質を論ぜず。体なくして誰か業を有つと。次に進

んで法相には藏識を以て根本とす。宇宙は藏識(三)の所現、根身器界

(三)唯識に云う第
八阿頼耶識。阿頼
耶は梵語アラーヤ
ālaya の音写。

は藏識によって現ず。藏識が見分を精神とし、相分は物質界と
し、自証分は精神の内面とす。藏識は有漏の根底にして、真如の
熏習に依れば、転じて三身四智等と転化す。頼耶を根本とす。

(四)大乘を性相二
宗に差別し、更に
性宗を再差別して
空性二宗に分ける
華嚴の所判であ
る。

(四)空宗には真性本空、現象界は悉く迷妄なりと。迷妄尽る時真性
顯示す。宗教の要は唯幻妄を破するにあり。妄滅すれば真自ら顯
わる。真性消極的。

三論宗を指す。

(五)円宗には本覺真心、本自不生不滅、不增不減、常住不變の仏性
を根底とす。本覺真心は自性天真、修を仮らず、迷亡する時は本

(五)華嚴經所説の
円融具徳の法門を
指す。

覚現前すと。衆生本来成仏、自ら識らざるのみと。此理を覚悟するとき即ち成仏、初発心時便成正覚、所有慧心依怙不覺等。

(一) 今弥陀宗の玄義は一仏円乗の教義にして、客体の本質性能を論ずるときは一仏乗の円教を以て最高円満、古來時間的に因果の二位を以て宗教關係を説明せり。今は横超的宗教、空間的に客体と主体との両方面に就て研究せん。実を剋して論ずれば円満なる宗教客体は、時間空間を以て主体と客体との區別をなすも、円満に其の真義を説明する能わず。

然れども相待的因果的の世界的方面の人々には、相待的因果的に説明せざれば其理を説明する能わざるの止むを得ざるによりてなり。

今は客体と主体との両方面として客体は能摂所帰、弥陀にして、主体は世界的所摂なり。

——「ミオヤの光」不二の巻 三巻六七頁〜六八頁——
——「ミオヤの光」三宝の巻 三巻四五六頁——

(一) 「広義の報身の必然的な目的論的無住処涅槃界であるこの大宇宙の一々の差別の現象が、即ち目的論的平等全一な主客未分の絶対的根源的、真実在の現象で、絶対自身で因果のない報身阿弥陀仏の全体である」。

☆

光明主義の安心三要領

一、所歸の本尊

〔高等宗教の本尊觀三種〕

古來、弥陀尊と諸仏との關係の區別を説くに種々の主義あり、此に就ては宗教に三種あり、一、一神教、二、汎神教、三、超在一神的汎神教。

一、一神教は基督教の神は一神教、只神のみ神性にして衆生には本神性具せず。然れども神に救わるゝ性あるのみ。衆生は根本的罪惡にして獄火に焼かるゝ外なし。然るに基督が衆生の罪に代りて贖う故に基督を通じて神の慈愛を信じて救わるゝと。仏教眞宗の弥陀仏に対する觀念もまた一神教的なり。二、仏教の中、禪及び天台華嚴等の主義は汎神教である。一切衆生悉有仏性、自己

の自性天真の仏性顯示すれば本来仏なりと。

(一) 従来の浄土教の弥陀尊は汎神教的の弥陀なり。何となれば十方諸仏の中に弥陀に帰し奉つるは彼仏の本願我等衆生を攝取して捨て玉わぬ故なり。弥陀も諸仏も本来同等の仏なれども只衆生摂取の本願が他に超ておる故に他仏に撰びて弥陀に帰すと云うが如きの故なり。三、超在一神的汎神。斯主義は本唯一絶対の神より出たる一切衆生なれば衆生に仏性あり。然れども^(二)祇本中心の独尊にして一切諸仏を統一し一切万行の帰趣する処の神尊に帰命信順し其独尊無量光の光明に攝取せらるゝにあらざれば仏性を開き煩惱を靈化して成仏すべきにあらず。弥陀尊は十方一切諸仏の本師本仏にして一切諸仏中の独尊にして一切諸仏万法を統攝して万善万行の帰趣する処弥陀に在り。

故に『楞伽經』に十方三世一切諸仏の法報応の仏及び諸菩薩聖

(一) 『無量壽經』

の法藏比丘の酬因感果の弥陀仏は汎神教的三世諸仏の一仏である。

法然上人が黒田の聖(じり)につかわされた御文

「二紙小消息」参照・☆

(二) 「ていほん」と読む。もと、おおもと。物事の本ずくところの意。

賢變化身等は悉く阿弥陀仏国より生ず、と。是諸仏の本地なるを証す。また斯^(三)『經』に無量寿仏威神光明最尊第一にして諸仏の光明及ぶこと能わずとは独尊の証なり。また『般舟三昧經』に三世一切諸仏は念弥陀三昧に依て正覺を成ずとは是帰趣の証なり。

是の如きの義の故に斯光明主義の弥陀は超在一神的汎神。^(四)一切衆生が弥陀の光明に摂取せられて而して後仏道を得る時は一切諸仏菩薩の爲めに其光明を歎ぜられんこと亦今の如くならんとは是一切衆生が諸仏と同じく成仏を得と明すが故に汎神なり。斯光明主義は超在一神的汎神教にして最圓滿に發達したる主義なり。

宗教には全宇宙に唯一独尊の靈格が在まして唯一の斯如来の外に我等一切衆生を摂取し靈化し玉う御方はましまさぬ。例えば宗教主体なる衆生の身体中に五体四支五官五臟六腑等の、乃至四百兆の細胞の一大団隊が我等一個の人間である。斯の一個の人に斯

(三)「無量壽經」を指す。この文同經卷上の「如来光明歡徳章」に出る。

「最尊第一」とは、汎神の弥陀、酬因感果の報身の場合には、体大法身無量光を宇宙最上位の絶対者、一切の根本仏と見る立場であるから比較的、相對的の「最尊唯一」で、絶対的の「最尊第一」ではない。☆

(四)右の(三)の同所に出る。

く無数の団隊の中に頭腦の王宮に在ます心靈が即ち独尊の主である。一家には家長あり一国には皇帝若くは大統領ありて有ゆる國民を統一する中心と為ている。天体には太陽が中心と成て数多の星宿を統率している。斯く其上々に統一的中心あり最終宇宙無限の絶対的中心独尊〔が〕なくてはならぬ。若し之が無くば宇宙全一に通すべき真理の統一を失う。斯唯一独尊を大乘仏教では何と名づくとすれば、釈尊は無量寿如来の威神光明最尊第一にして諸仏の光明及ぶこと能わざる処と。即ち無量寿また無量光アミダの名を以て独尊とて一切諸仏を統一し玉う中心となす。斯真理を明にして初めて完全なる宗教心が成立す。是超在一神的汎神教とする所以なり。

(一) 本有無作の報身

三身の説に就いては宗々其見解を異にして仏教中未だ一定したる説なし。然るに仏教に実相論あり縁起論あり。聖道主義（哲

学）浄土主義（宗教）あり。其宗教意識の立脚地が各別の故に客体なる如来三身説も同一ならず。若し聖道（哲学）と浄土（宗教）

との立脚地を異にする處を陳^{のぶ}れば、聖道門は因果的關係を以て

現在の衆生と当來の仏陀とを區別し關係する時間的關係。乙は

空間の關係である。暫く聖道門にて因果の關係とは衆生初発心菩

提心を發して菩薩の願行を起し、若しは長時に若しは短時に初発

心より一生補処に至る階位を菩薩の五位とす。^(二)既に因円果滿を仏

果とす。因地に自己の発心と自己の行為が自己の仏果を成就する

にあり、斯の因果的の規定に就いては宗派によつて同じからず。

(一) このみ教は広義の報身に関する弁榮聖者の真精神が玉石混交でなく明了に示されているものである。

(二) 唯識では修道の大乗の五位として資糧位、加行位、通達位、修習位、究竟位。これに準じて小乗の五位として資糧位、加行位、見道位、修道位、無學位があるとする。

浄土教は宗教にして（因縁）即ち主体と客体との關係にあり。

如来の光明と衆生の信念との關係なり。光明また恩寵とも云うべし。人の信念を摂護し同化し給うの義。信念とは如来の恩寵を信受し靈に活きんとの義。例えば太陽の光熱化の力によりて地上の生物が養成せるゝ如く、また太陽の能力には生物を養成するの功用あり。如来の光明には威神と慈悲と智慧との三靈力ありて人の知力と感情と意志とを靈育し給う。衆生は信ずるが故に如来光明を獲得し念ずるが故に信心を増長す。

斯の如く衆生の信念を因とし如来の大光明を増上縁として衆生心を長養す。斯の如き因縁によつて成立する宗教に於ては必ずしも聖道門の如く因果的の規定を要せぬ。

宗教の客体たる如来は必ずしも酬因感果の仏陀救済的の対象を要せぬ。若し如来が全く六度万行の因に報いて其の結果たる因果

律より成立したる如来が吾人に対して因果の規定に依らずして救済の果を得らるべき理なし。云い換えれば弥陀が菩薩万行の因を積みおきし故に吾らが果満の仏と成り得らるゝと云うことは古来より疑わるゝ他作自受の難を免れぬ。本来絶対者の法則は二回に行われている。一回は天則に依つて自然界に行われている方法は一切の生物に対して因果的ならぬはない。心靈界の方面は統一的の目的の理性は有るけれども自然界の生物の如くの因果律が行われ居ると思われぬ。抑も報身の光明界即ち涅槃常樂界なるものは因果律に器械的に建造したるものにあらず。

絶対大靈界には重々無尽の靈徳具備して其内容は真善微妙にして有らゆる万善万美の極致である。其中心本尊の神尊は一切真理の本源一大靈力の原動にして因果の法則より成立したるものに非ず。其大主権者は一切法則の本源一切因果の基本には為り得ると

(一) 光明主義では衆生が直接に根本仏を念ずること(自作)により三身四智の身となる結果を受ける(自受)とする。これが如来の事実であるが、從來のように法藏比丘が菩薩万行を積み本願を成就したから(この他作により)、衆生が念仏により往生出来るとの結果を受ける(自受する)。もしこれが事実ならば他作自受の變なことになる。

云えども中心本尊が因果律によりて成立したるものとは考えられぬ。

絶対者が心霊界の方に摂取するは即ち是合目的である。絶対者が天則に依りて因果法則によりて器械的世界の方面に一切衆生を生成するは是吾人が現に生れ居る自然界である。此生物の生成には因果律によりて為る。然れども宗教の目的とする処の精神的に絶対界に闖入せんには、絶対者の聖意とも名づくべき謂わゆる終局目的の理性に随わざるべからず。吾人が永遠の生命と絶待靈に合致せんには相待因果法に依らずして絶待の終局目的に依属せざるべからず。

絶待なる大権威者が衆生の因果律に依りて成仏したるものとは考えられぬ。また絶待界は因果法に依りて成立したる結果とも考えられぬ。絶対者の終局目的の勢力に随順して初めて吾人は如来

に撰取し同化せらるべし。吾人は一心念仏三昧に依りて絶待威靈者大慈愛者と合致することを得らる。此合致したる大靈界の如來は因果法から成就された靈格とは考えられぬ。矢張り本有無作の報身と信ぜざるをえぬ。

——「ミオヤの光」三昧の巻 二卷二五四頁—二五五頁—
——「難思光・無称光・超日月光」 四八頁—五一頁——

二、所求の目的

〔釈尊の宗教目的〕

仏教、釈尊の宗教目的は那邊に在かと云わゞ人は本來質のまゝでは本心の靈性も發揮せず煩惱の惡質も脱却せず此のまゝではないかぬ。釈尊は自ら太子の時代に在て人生問題に煩悶しまた自己の胸中には無明なる不靈福なる垢質具有するが為に精神生活が靈明でなかつた。然して後に入山學道の後は無上正覺を証得なされた

當時從來の無明罪惡の人間の心が滅殺して靈なる光明を獲、正覺を成じて生死の凡夫が永生の靈と生れ更りかわなされた。こゝに於て精神的に心機一転して生れ更つた此精神狀態は実に無明の闇夜より正覺の旭出で新たに生れ人格が一変しなされた。從來は人間の肉に生れたるもの生死の凡夫なりしが永生の聖者と更り、此に至て見れば肉体の上には異つたことなけれども精神上に大革新した。之を有余涅槃うよと云う。有余とは餘依あとて此の依身を指すなり。此の依身は替らざれども精神が更あらたまりて。精神更まり来つて觀れば宇宙全体がまた新たに白日青天、從來の娑婆の閻宅に在りし人が蓮華藏界光明裡の人となる。涅槃とは生死を超たる永恒常樂の境界にして極樂とも云う。即ち常住安樂自在清淨の靈界にして、諸の聖者の心靈の安住する處、実には客觀界に認識すべき處にあらずして主觀界に実觀すべき直觀の靈界である。此靈界に種

々無量の莊嚴何とも云うべからざる至善至妙の境界が在る。

実を尅して論ずれば人の精神の最奥底を開きて円満に靈的に完成したる人の精神世界である。此光明主義の理想とする処の心的成就の極致である。

既に精神が宗教に依つて一転し来れば此れ靈に生れ更りしなり。然れども此の肉体の有らん限りは自然の生理あり制裁を免れず飢寒困苦なきにあらず。

弥々此の依身の報命尽きて分解するに及んでは、心靈は曾つて理想的に安住したる靈界が実現し来る、永恒常樂の寂光土が現われ来る。諸の聖者諸仏の常住に住し給う理想の妙境界、即ち常樂我淨の園に真善微妙の花咲き匂う所、生死諸の苦惱脱して自然微妙の樂土の故に極樂といい、また無量光明土とも智慧土とも常寂

(一) この世に生存中に三身四智の仏眼、超日月光に於ける入の位の仏眼で明了に三昧体験する精神世界のことである。

(二) 「聖者がここので言つておられるこの肉体の中には肉の心が含まれてゐる」と戒淨上人は言われた。

(三) ☆

光〔土〕とも種々の麗わしき名を以て表せらるる処、^(一)是れ光明主義の最終の目的と為る処である。

無住処涅槃とは、生死に住せず涅槃に任せず、永恒常住に、一方には涅槃界に安住して、また一面には生死界に分身応化して、衆生済度の事業未だ曾て暫くも懈怠せざるなり、故に無住処涅槃と云う。

——「ミオヤの光」撰化の巻 一卷一五三頁—一五四頁——
——「ミオヤの光」法悦の巻 四卷二七五頁—二七六頁——
——「無対光」 五九頁—六〇頁——

更生——精神と身体

(二) 往生即ち更生なり。此に二位あり。精神と及び身体なり。精神の更生とは従前の肉我を転じて真我の生命と化り、^{かわ}情操一変するところ、^{すなわ}便ち新しき人となる。光明界裡聖の者として昨日の我と異なる観あり。有余の依身は^{えしん}変らねど神は浄土に棲遊ぶ。^{すみ}聖懷の^{こころ}中に^{あんりゆう}安立する真情は毀譽八風の為に動揺されず。既に精神更生

(一) 六七頁の脚註
(三) 参照

(二) 從來は命終つて他の世界に往生れること。十方往生、兜率往生、極樂往生などがあるが、弥陀浄土信仰が盛大になるにつれ後世専ら西方極樂往生を意味するようになった。然し往生は元來梵語プラティヤジャヤテイ——
dradhataveの訳であつて再生と訳す方が適訳で、往生の生は移転の義に非ずして状態の変化と見る

し去つて現世界を觀じ来る時は、昨日のそれと異れり。且て蔑視したる如き厭穢の魔郷にあらで、是よりは弥いよいよ向上し目的なる真理の靈界に進むべき菩薩が天職を果すべき方便修行土なりし。

斯この光吾人を目覚めせしむるに人生の真理を以つてす。然り而して吾人はいかに聖意みむねを体现せん。いな光榮を現わすべき行動せん。曰く、吾人は聖子たる靈我実現の為にあらゆる力を竭つくすべきにあり。即ち理想の觀音として我と他とを同一視し、他の苦は即ち己が苦なり、己が樂を以つて他に分たんと欲す。正義の意志は勢至と同じうし、即ち己おのれを尅せめ己ささを犠さげて聖意の現われにつとめ、己が分を守り他人の福祉を保護し、又真勇沈毅いかなることに望みても屈せず撓たゆまず。また吾人は不動の智劍とを執りて己が貪瞋痴を害し、地藏の愛ならに倣ならいて世の人に待せん。高尚なる理想を文珠の聖童に習い、遠大なる希望を普賢の行願に学び、向上進

べきであり、聖者は往生即ち更生の義で、これに精神的更生（理想的往生）と身体的更生（實在的往生）の二位があると説かれた。

趣、万善万行をもて此土^{このど}に楽邦^{ごくらく}を実現さん。悪人の迫害は心靈を研く^ひの利器。一切の誘惑は尅己^{こくぎ}忍耐の試験具。若し現世界を以つて目的ある階梯なる修行土と觀じ来る時は、菩薩六度万行を修すべき諸の器具が全備^{そなわ}るに非ずや。經に^(一)此土一日の修行は淨土に於いて百歳するに勝れりと。吾人は斯る大利なる此土なることを自覺するが故に、寸陰を宝とし己の本務を竭^{つく}さんとすべく、然り而して方便土^(二)のつとめを全く卒^{おわ}る日には、必ず目的たる實在の報土、即ち無余涅槃界に帰る期あるを信ず。經に^(三)「其國に生じ諸の菩薩聲聞大衆に共に歎譽して其功德を称せられん」とは蓋し精神更生し已^{すで}つて聖旨實現の為に活動せる人を称するなり。身体^{あそ}の更生。已^{すで}に更生したる精神は如来大心光中に理想の淨土に逍遙^{あそ}ぶもの、肉^(四)の有らん限りは自然^(五)の約束を全く脱する能わ^(六)ず。弥方便^(六)。

(一)「無量壽經」卷下に出る。

(二) 三身四智の仏眼を得てミオヤのお世嗣となつてからこの世を去るの意。

(三)「無量壽經」卷上の「如来光明歎德章」に出る。

(四) この「肉」の中には肉の心をも含む。

☆

の業を卒る曉には、無明生死の夢醒めて大ネハン城にて無上菩提の宮に住し、真善美妙の園には常樂我淨の華鮮かに四智円満の日は明けく、三身一如の月清らかなり。然るときは即ち体は本覺の都に在つて化を百億に分ち、こゝに於いて一切諸仏は即ち本覺の弥陀。弥陀即ち一切諸仏たるの真理は自ら證らん。

三、所修の行法

念仏三義

(七) 鎮西流には請求。真宗感謝。当流三昧。

念仏の要は仏心と衆生心との合一する所にあり。此に救済融合靈化等の功能あり。念仏三昧を宗と為し往生淨土を体と為す。仏心と衆生心との完き結合する時に、仏心は増上強きが故に衆生心を

——「ミオヤの光」讀解要解の巻 二卷二一九頁——
——「ミオヤの光」月影の巻 四卷二三八頁——
——「無對光」二〇六頁—二〇八頁——

- (七) 法然上人門下の諸流の一。法然上人の正統派として、鎮西上人聖光房弁長を派祖とする。今の淨土宗。
- (八) 親鸞上人を祖とする門流の稱。具さには淨土真宗と稱し、昔は一向宗、門徒宗と云つた。
- (九) 光明主義

同化す。譬へば闇室に日光入る時は闇去り明来るが如く、如來の日光は衆生の心の闇室を照す。凡夫闇黒の生活が轉じて光明生活と為る時一切悉く變化す。

仏、生、合意する処に、靈感あり、生命あり、力あり。

鎮西流は此正まさ的合あ一いつを未來に期し、仏は西の彼岸に置き自己は東方の穢土にあり。助け給えと常に念仏し念仏の数を定めて歩々に進む。仏生の結合は始よりも、終にありて未來にありとし、臨終の夕に初めて結合す。故に平生の念仏は臨終一刹那の結合の契機を正當にせんが為にす。若し此一刹那にして契合せざらんか、生涯の無数億萬の念仏悉く徒勞に帰す。平生には我と弥陀とは結合せぬ。聖靈感もなく妙味もなく、唯勞力是我等が本務と為す。次に真宗の念仏は衆生仏性もなく、力もなく、唯有するものは罪惡の充満する處、只地獄に墮落する外なき聚合煩惱に過ぎず。

斯る罪惡の凡夫の為に弥陀五劫に思惟し永劫に苦行する。偏に是我等が墮獄の罪を贖あがなわんが為なり。我等を救済するの願行已に十劫前に成就して攝取の光明常に衆生を照し給う。我等如何に罪深きも弥陀既に贖罪の功成ず。弥陀の願行偏に我一人の為なりと。弥陀の願意を無うたが疑いなく、無うら慮おも、仰いで信受して、一に此真義を会解えげする時に歡喜無量。此歡喜の一刹那已に弥陀の本願我ものと為る。十劫の正覺を当念に獲得してよりは已に正定聚しやうじやうじゆ。身はここに在りながら已に不退地の聖衆しやうじゆである。故に已に救われたる身なれば、唯已に救われた過去を追回しては感謝の念仏すべしと。是真宗の過去追回感謝念仏なり。弥陀と衆生との合一は已に歡喜一念、爰に至れば、已に十劫已前に円満に成就したる我等が救済なれば、敢て進むべき機能を要せず。弥陀の大願に歸すれば罪惡も敢て恐るるなし。只報恩念仏すべしと。

鎮西は未來に合一を求め、真宗は過去已に合す、追回報恩の外に念仏の要なしとす。過ぎたるは及ばざる如く、何れも未來と過去とのみ中心を立つるが故に正中を得ず。

当流は其中流に立て而も両端を統ぶる念仏である。然れども弥陀と衆生との合一を得る迄は、鎮西の如く、専ら若しは念仏し若しは讃頌し、師友知識の指導を仰ぎ、中心主義なる弥陀との正當の合一を期すべく。其合一に於ても、一面より見れば、得たる當念に全体合致す、真宗の如く平等の方面。一面より見れば、行布門にて、鎮西の如く如来光明中に在つて向上進趣す。

永劫に弥陀と離れず。過去を追わず、未來を。念々唯即今の當念、永に弥陀と合一す。としえ常に弥陀無限の泉源より自己心中に混々として靈泉湧出す。

是念仏三昧である。三昧とは過去に非ず、未來に非ず、即今當念

(一) 徹底的選択主義に立脚した一番よい見仏の道によつて法身の中心である絶対の報身のある

弥陀と合す。念々唯当念、^{たとい}仮令無量劫を経るとも常恒の当念弥陀と共にす。弥陀は絶対無限の靈徳あるが故に、弥陀の中に在て我等は未來々々に向け当念を離れずして益々向上す。已に得たる過去を追回しては偏に弥陀の大悲なるを憶念して報謝す。

(一) 常恒に過去未來を統ぶる現在当念を尊しとす。念々弥陀に在りて弥陀の靈力を我当念に実現す。

弥陀は絶対無限の靈徳なれども我当念を離れて感ずるなく、無限の靈力は我当念〔に〕実現す。

当念を離れずして念々向上す。未來々々に向つて前途に希望断ゆる事なし。高遠なる理想は当念を離れず実現せんとす。弥陀は常恒不断の大活動態なれば念々常恒に当念を尊ぶものに靈力を施す。

吾人は太陽の光熱が千万年の照したる昔の影を捉えがたし。ま

相好全体を中心である慈悲の聖容を、相對的に無限の變化し乍ら不易で常に同一である相好と感じつつ、何時も出来るだけ大きく出来るだけはつきり見奉つてゐることが出来るように、大ミオヤを徹底的にお慕い申す現在当念を通じて大ミオヤのお世嗣になるべく精進努力をする。これが光明主義の、過去と未來を統べる現在当念を最重視する、理性と感性が統一してゐる唯一無二の王三昧、即ち十界事具である性具の真相と一即一切事々無碍の性起である法界縁起が統一してゐる直線道の念仏である。☆

た明日の光を待つより即今当照の光を用いて満足す。然ればとて過去の恩を報ぜざるに非ず未来の力を要せざるにあらず。唯現在即今の当念、絶対無限の光を小き吾人の心意に使用する。

充滿されて不足なければなり。

(一) 即今当念弥陀合一の念仏。

之れ靈感である。

絶対無限の靈光中の念々、自己に実感しつゝある当念の当念は無量寿にして永遠に断えざるものと信ず。

——「ミオヤの光」宗要の巻 三卷二八二頁——

——「無対光」二六七頁——二七〇頁——

(二) 念 仏 (意、口、身)

真理の終局に帰趣すれば仏界に入るなり。仏界に帰するは真理なる故に自然なり。法然なり。故に易往といふ。唯絶対無限光寿即ち弥陀^(三)の聖名^{みな あが みむね}を崇め聖意を仰ぎ帰し奉りて、意^(四)に至尊をのみ

(一)(一) 七四頁の脚註
参照

(二) このみ教は聖者の真精神だけが明了に示されたものである。

(三) 「弥陀」とは法身の粹である広義の報身である。

(四) ☆

憶念し、口に聖名を称え、身に聖意の実現に行動すべし。一念弥陀なれば一念の仏。念々弥陀なれば念々の仏。仏を念ずる外に仏に成る道なし。三世諸仏は念弥陀三昧によりて正覺を成ずと南無

(五)
仏陀 禪那

——「ミオヤの光」恩寵の巻 四巻一九七頁——
——「難思光・無称光・超日月光」 五三頁〜五四頁——

(五) 弁榮聖者の号で、「如来を念う心になりきつている」意であると聖者は言われた。従つて「三千界中唯心眼の前に仏あるのみ」と同義だと戒浄上人は申された。

開
闡
法
門

仏陀自ら永遠不滅の大光明を得たる仏眼を以て一切衆生を視給うて喟然として歎じて曰く、奇なる哉一切衆生自己と同じく一切智無師自然智本自具足して仏と異ること無し。我如何にして衆生の仏智見を開示して我と同じく不滅の聖者たらしめんと。抑此れ釈尊そもそも仏教を以て一切を度するの目的此処にあり。

今弁榮身を末世澆季に受く、性拙く身劣るも靈性は同じく毘盧びるの分身なり。

旭日耀然として世を照す。戸窓開く処に、金殿玉樓まどのみならんや、仮令茅屋草廬たとえたりとも窓の開く処に日光の射入する事何ぞ異らん。心靈開示し永遠不滅の大光明を我が同朋と共にせん事を希う。

「如來の靈徳を密かに開くの命を奉ず」

其後の我が経歴談を暫らく聞き玉えよ。

三十一年より三河、尾張、美濃、伊勢の地方また東国にても例の阿弥陀經を播布に熱心し少青年のために仏種を下さんとの志より已に十有余五万部まで施与して弘通したりき。其後少しく健康を害して関西に二年ほど出張を止めて東国にて伝道に従事したりし。三十四五年頃大いに感ずる処ありて伝道の余暇浄土教の哲學的方面に研究することにつとめて、大いに得たる処あり。関西仏教盛なる土地に於て僧侶衆の請によりて自己研究の浄土教哲學を講習せること十数ヶ所にて開きたりき。

之を仰げば彌いよく高く之を鑽きればいよ／＼かたく実に広大甚深不可思議なるものは弥陀の光明なり。

古人曰く、弥陀は名を以て衆生を度すと。

(一) 元祖大師は十八歳の時より四十三歳に至るまで一切聖經は勿論
所有る宗旨の学問にまで研究に精を尽し一切仏教中よりえらみ択
んで弥陀の名号を抽きて所帰を定む。『選択(本願)念仏集』は是宗
祖が一切仏教中にえらみぬきて集めたるものなり。其選択の眼目
は名号にあり。名は即ち体を徴す。阿弥陀の中に如来の三身四智
乃至一切方徳悉く具備して余りなしと。此の芳躅により

阿弥陀の聖名を開きたる

弥陀の十二光聖名、其靈徳を詮表する処の洪名、焉ぞ唯誇大的
に無量無辺の靈名を列ねたるものならんやと。

専ら仏力を仰ぎて念仏三昧門を開き絶対的無限の靈徳より表顕
せる十二光の靈名に於て十方一切の世界一切衆生を摂収同化し給
う処の真理を知見せられたり。実に如来の境界は凡夫心力の及ぶ

(一) 淨土宗の開祖法然上人(1133-1212) 諱は源空

・承安五年(1175)三月四十三才の時

善導大師の教に依つて立教開宗、建

永二年(1207)二月法難により土佐

に配流、十二月赦免、建曆二年正月

廿五日八十才寂。

世に元祖上人、吉水大師、黒谷上人

等と尊称す。

処にあらす此神秘不測の妙境を窺わんと欲せばいかなる方便を以てか之を能くせん。

空拳を以ていかでか千重の鉄関を打破することを得ん。此大鉄関を開くの妙鍵は即ち十二光名によりて其体を発悟するにありと。古来千聖出て名を以て体を獲得すべき径路を示し給えどもいまだ之を開きて十二名を以て諦あきらかに如来の体相用を窺うべきの真理をのこし給いしは深意あり、後昆をして此靈名によりて広く深く細に微に如来の聖徳を獲得せよとの聖意ならん。

世間文化大に発達せり。宗教焉ぞ独り開発せざるの理あらんや。ここに於て、如来竊ひそかにこの愚昧なる小弟子をえらみて之を開くべきの宝鑰やくを授与し給えるなり。故に選ばれたる小弟子自ら不敏を顧みず、十二光によりて

如来の靈徳を密かに開くの命を奉ず。自ら感謝措くことを知らざ

るなり。

宇宙の真理は悉く十二光によりて罄つくせり。

依つて如来光明三昧を以て主義とし奉るなり。

世の闇と罪と悩とにまどいつゝあるものに此光明を与えんと欲して止まざるなり。

三世諸仏は此光明によりて成仏し給えり。

一切の聖賢は此靈徳に依りて得度し給えり。

其のち寢てもさめても光明三昧にて候。此光明を惣表するものはなむあみだ仏にて候。

——「お慈悲のたより上巻」 三七一頁〜三七五頁——

「光明主義にあらずば何によつてか救われん」

時到れるや。光明主義西に東に到る処に行われ候。また西に東に志士仁人此道に入ること、むかし今より十年のそのかみとは大

にかわりて志深き人士は悉く此道より真の道に入る光明主義が現代の国民を闇黒より永遠の光明に復活せしむる道にて候。甚深の真理を闡明したる大乘の円教は是真義を説明したる学説にて候。

大乘円教の真理を一切国民の上に実行せしむるは念仏三昧光明名号の一行にて候。されば聖善導が光明名号撰化十方とは只弥陀の光明のみが十方一切衆生を摂して人々を靈活せしむる行にて候。

若し人至心不斷に念仏三昧を修する時は必ず心靈開發して如來の光明に靈化せらるべし。其靈化せらるゝ時はいかなる心理状態と相成候哉となれば、即ち清淨と歡喜と智慧と不斷とに靈化せらる。されば行は念仏の一行にあり、解は十二の光明に依るべし。

若し念仏の一行を以て三昧^{ほつ}發得する時は十二光明が自己心中の顯現とならん。十二光の真理を実感せんと欲せば念仏の一行に、弥

(一) 中国淨土教の大成者。(613~882) 中国淨土五祖の第三とし善導流念仏の創始者として淨土宗では宗祖に對し高祖と尊稱す。真宗では七高僧の第五に列す。唐代涇州の人。光明寺の和尚、光明大師、終南大師等と稱せられる。晩年三身四智の仏眼を開かれた。

陀無量光明中の無量無辺無尽不可説不可思議の妙法秘密藏を開かんと欲せば十二光は秘密の宝鑰なり。若し釈尊此土に出現し玉いて十二光の宝号の宝鑰を与え玉わざりせば一切衆生は如来の秘藏を開きて其甚深の内容を窺うこと能わざりしなり。此十二光の宝鑰は古往今来いまだ曾つて眞の宝鑰たるを知るの人師なく只虚しく宝の持ちぐされたるなり。物理上の電力が昔空しく使用せざりし如く、若し人念仏して十二の光明の宝鑰を以て如来の秘藏を開きて初めて活きたる仏教となり人生の眞義を悟ることを得るなり。

時到れる哉。

如来は世の為に此宝鑰を与え玉えり。

折角人と生れ人生の眞意義を知らず闇より闇に入る比々皆爾り、光明主義を以て之を照すにあらずば何に依つてか救われん。

仏陀禪那は光明主義の予言者である

宗教が未開の時代より開明に進むに随つて自然に階級あることは曾つて御話いたせしことゝ存じ候。なれども世界通じて三階にわかつ。初、自然教、二、超自然教、三、円具教。自然教は幼稚なる知識の時代の宗教。神は自然界の日月山河八百万等を崇拜し、而してかたちの上の幸福を祈りて後生とか死後の幸福は未だ知らず。我日本の神道また仏教にても平安朝に開きし真言天台は即ち現世主義である。現世いのりの宗教を自然教と云う。次に世間の文化と宗教と共に進んで鎌倉時代に^{おと}発りし超自然教は、浄土教の如き現世は夢幻のしばしのほど未来遠き極樂に生れてこそ眞の幸福は得らる。さればとても此世は仕方がないから、未来死して後極樂まいるの念仏また信心、阿弥陀さまでも此世はしかたがなしというのか、此自然界を超えたるむこうに望を立つるが超然教

(一) 真言宗の略。

弘法大師によつて中国密教が我國に伝えられ(大同元年880)一宗として独立したものの。

(二) 天台宗の略。

延暦廿四年(885)伝教大師これを伝え比叡山にあつて弘めた。

(三) 仏教の教祖。

(Gautama)

姓ゴータマ、名はシッダータ。釈迦とはその種族の名称シャークヤのSakyaであり、釈迦牟尼とは釈迦族より出た聖者の意で略して釈迦という。仏陀、如来、世尊、明行足など十の尊号が古くよりあり、近來一般に用いられる釈尊は釈迦牟尼

である。たゞ肉体の幸福を求めず靈魂の救を専らにす、即ち淨土宗眞宗等の主義是なり。世の文化と共に進みて当に眞の宗教世に出でんとす。是ぞ円具教即ち如来光明主義である。其予言者は即ち仏陀禪那である。予言とは此より将来は斯主義に依つて救の道をなすちよう、今日にして将来の宗教を世に紹介するもの、謂なり。故に予言者は旧来の宗教家には憎嫉せらる蛇蝎視せらる。釈迦、キリストにしても、また法然、日蓮にしても或一部の人には歓迎せられ一部の人には憎まれ妨害加えられし。これ免れ難き理である。

さて円具教の如来光明主義は客体の如来を必ずしも遠き彼岸に置かず、十方法界悉く活る如来の大明光明中である。但し衆生煩惱に障えられて之を知見すること能わず。然れども信心徹到すれば如来の心光と衆生の信心とは三昧一致して光明を発得すること

世尊の略称と考えられる。光明主義では釈尊を根本仏三身即一広義の報身の能動的な分身、応身と見る。
(四) キリスト教の始祖。キリストの予言者はユダヤに伝承されたヘブライ語メシヤのギリシャ語訳、「油を注がれた者」の意で普通救世主と訳される。キリスト教徒はナザレのイエスをメシアと考え、イエス自身もその自覚を有したようである。
ユダヤ教徒はこれを認めず潜称者として遂に磔刑に処した。(A.B.C.)
三位一体の神の第一のペルソナである。
(五) ☆

を得。人の天然即ち生れたまゝの意識は本より劣等なり無明なり罪惡なり、心光獲得して始めて靈格となる。光明中の人と更生す。

更生即ち往生なり。精神の更生である。更生したる後といえども煩惱なきに非ず。然れども光明によりて自己を制裁するの力あり。また苦憂なきにあらず苦悩あればこそ歆喜光を仰ぐの要あり。常に罪惡苦悩と健闘して不断光によりて勇氣を鼓舞し此生涯は煩惱と奮闘の生活である。已に靈化しぬれば昨日までの苦もまた苦と感ずるほどのことなし。此土一日は浄土百歳より勝れたり。何ぞそれ何の苦がある。今は理想の浄土に在りて生活し而していよく命終らば實在の浄土に生ず。

斯の如きは是精神的光明主義である。仏陀禪那は光明主義の予言者である。

光明會趣意書

大ミオヤより命ぜられたる宗教革命の準備に働らくことにつきては実に不惜身命にて候。

今に遠きか近きかわしらず、宗教の革命は必ず来るべき物とおもえば、うれしくも感じられて候。（中略）

さて何にしても頼^{やが}て来るべき宗教革命の期までの仕事を只むだに働らきて居るか真実其準備として働きて居るかの二つにて候。

光明会趣意書

この教団は如来ちよう唯一の大御親を信じ其慈悲と智慧との心的光明を獲得し精神的に現世を通じて永遠の光明に入るの教団なり。其大御親とは宇宙唯一の靈体にて心靈界の大日輪なり。明治天皇の「朝な夕な御親の神に祈るなり我が国民を守り給えと」

「目に見えぬ神のこゝろに通うこそ人の心の誠なりけれ」との御

製は畏くも其御消息と拝し^{たてまつ}上らる。また孔^(一)夫子が天道と呼玉いし

同じく唯一の大御親の別号に外ならずと信ず。凡そ一切の人類は

其大御親の分子たる仏性は具すれども大御親の慈悲と智慧との光

明によらざれば靈性を顕彰すること能わず。この永遠不滅の靈活

なる大御親の實在と其真理なることを実証し給う教祖釈迦牟尼仏

は殊に明かに其大光明に接触するの道と云べき八万四千の法を説

(一) 儒教の祖 (紀元前475B.C.) 孔子の尊称・中国春秋時代の人・名は丘、字は仲尼・世界三聖の一に数えられる。

き給えり。この大光明を八万の方面にわたりて教え給いしは恰も太陽の光は一なれども照らさるゝものは無量なるが如し。

されば吾人が仏陀の教に信賴して信念功を成ずる時は必らず靈的光明に感觸して無明の夜あけて光明界中の人と成りぬべし。然してこの光明中の人となれば自おのずから大御親の聖寵により清き心の御子となるが故に相互に眞實親愛の情を以て相待するに至るべし。

人たるものこの天地間に生をうけ万物の靈長たり此光明を獲得せずして可ならんや。曾て聞けり世の進化の順序は喻えば人の道を歩行するに両脚の互に運びて進むが如しと。人の精神の働らきを内外両面に分てば先ず教育政治等のすべて外部に向つて働くべき方向とまた宗教家庭道德等の内部に向つてつとむべき方面とあり。顧おもうに今や吾国民は外部の文明は長足の進歩を以て發達し今日の隆盛を見るに至れり。是よりは宗教及び道德等の方面に於て

大に進むべき時期到来せり。長らく眠り居りし国民の内的靈性が
覚醒せざるべからざる暁は近けり。宗教は人類の内的生活を高尚
にしまた正善にし且幸福を感じしむるものなり。こゝに於て吾人
は時機相應の信仰的団体を結び共に教理を研究しまた信念を修養
して互に相提携し真理の大御親の聖意にかな称う清き同胞として光明
の裡に生活し現在を通じて精神的に永遠の淨界に進行するを目的
とせん。願くば吾が敬愛せる清き同胞衆生よ吾人は相互に弟たり
兄たり共に携へて大御親の光明の大道を進まんことを望むものな
り。^(一)茲(とこ)に教団を結び其目的を達せんと欲する所以ゆゑんなり。

首唱者 仏陀禪那 弁栄

——「ミオヤの光」欣慕の巻 一卷四四五頁——
——「日本の光」三九三頁—三九五頁——

(一) 大正三年一枚刷
にて頒布された。

如来光明会の趣意

釈迦如来此世に出現し玉う本意は、一切衆生の爲めに心靈界の太陽なる永遠不滅の無量光如来の本願力を教えて衆生の心霊を復活し、現在を通じて永遠光明の人と為さしむるにあり。

願わくは我同胞衆よ、受がたき人身を受け値いがたき仏法に遇いたり。幸に如来大悲の本願を信じ光明の生活に入り意義ある人生前途に光明を認めつゝ向上の一路に共にく進まんとするの此会に入り共に無上の法味を味わい、互に相勧め相扶けて善道に進まんことを望み普く世の有縁に勧むるものなり。ナム。

大正四年五月

仏陀禅那 弁栄

光明主義要文

光明宗は、如来の光明を獲得するを宗とす。自ら光明を獲得するを自利とす。他に光明を頒布するを利他とす。人の精神には現世と未来との別なし。現世に精神に光明を獲得する故に、未来も光明界に帰すことをう。阿弥陀仏は光明なり。阿弥陀仏の心を得る即ち光明獲得なり。光明界の生活、光明の活動。現世にはガラスを隔てて如来光明中。命終せば現実の光明界、光明の体となる。

(一) 仏法に門多しと雖も要中の要なるものは念仏三昧門なり。念仏三昧門にまた方面多なりと雖ども、口くちに聖名みなを称え意こころに慈悲の聖み容かおを憶おもい愛慕して止まざる時は面まのあたり慈悲のみすがたは想念の中におがむことを得べし。行住坐臥一切の作務さむに拘わらず憶念常に繫かかつて忘れざる時は必らず業事ごうじようべん成算すべし。

——「お慈悲のたより上巻」 一頁——

(二) 宗教は衆生をして人格的に靈活せしむるにあり。故に弥陀は、衆生を愛する大慈悲が相好に表われ、万徳円満なる人格と現われ、如来の人格現は其の光明に接触する念仏者を人格的に靈化する為である。弥陀の威神極りなく儼臨し給うことは、衆生的人格を神聖ならしめんが為に、慈悲の相好は我等が内容を愛化せん為である。

——「ミオヤの光」撰取の巻 二巻四二〇頁——

(一) 及び 92 頁の (一)
(二) 及び 92 頁の (二)
(三) 及び 92 頁の (三) に共通した起行の用心——
ミオヤの絶対円満な容を憶念する唯一道を直進して、いい三昧ばかり頂きたいと願うべきこと。
尚、聖者の心行論の特長はこれを「心行の形式」と「起行の用心」の二門に明了に分別し、前者も大切であるが後者が更に大切であるとして、従皮徹髓義を力説強調された所にある。

(一) 念仏三昧を修して三相昧^{さんさみ}應し信念^{しんねん}到る所に大観念の窓は開かれん。称名は此の関門を叩くの声なり。憶念は此宝蔵を開くの宝鑰^{ほうやく}なり。若し念仏三昧の鍵を用いずば、如来の一大観念界の門は開くべからず。此秘密の蔵を開くにあらざれば蓮華蔵界の法界宮に到ること能わざるべし。

——「光明の生活」 一二五頁——

(二) 靈應交感心機一轉^{こうやく}の功鑰^{こうやく}を得んとする、即ち発得を期するに、一の応身即ち弥陀空中住立^{じゅうりゅう}の如き、キリストの再生^{しょうてん}生天の相の如くによりて、自己の感性の靈應を成ぜしむるは最も速なり。

——「ミオヤの光」仏果の巻 四巻一二三頁——

(三) 如来は絶対的に尊とく在まして何の処にも在まさざることなき靈体なれば、唯無上の尊敬心を以てアナタは今現に真正面に在ますものと信じて靈名^{みな}を呼び奉れば大ミオヤの大慈悲の靈胸^{みむね}に響き

(一) 前頁の脚註
(二) 参照。尚(二)は「ワイド版あとがき」の(2)を参照。

(三) 五根五力の修行方法。このみ教を確実に実行するのが光明主義念仏の第一歩である。

(四) 完全な起行の用心によつて私共の心に想い上げる大ミオヤの慈悲の聖容を聖者はこのように言われた。故に「絶対の表現」となるか、それともどの程度の方便としての心靈的現象となるかは目的論的に私共の信念に相應して定まる。

まなじり

て慈悲の眸を注ぎて我を見そなわし給うと思いたまえ。また大悲のミオヤをお慕い申して一心に念じ奉るべきものであります。

——「人生の帰趣」 三六六頁——「無礙光」 二五〇頁——
——「ミオヤの光」 第二巻第三号・一巻六八頁——「ミオヤの光」 南無の巻 三巻九七頁——

四如来は絶対無限大威靈と大自在と大慈愛とより我らを愛したまう慈悲からして、いと麗わしき慈悲の面を表わして我を愛し給うことを示したまう。其慈悲の表現に対しては実に我等は愛慕慈念せざるを得ぬ。真実に宇宙間唯一無二の靈的人格現に対しては我らは愛念せざるを得ぬ。宇宙全体の大靈より表現したる人格現なれば其所現の身の大小に拘らず絶対の表現なり。^(四)この靈的表現の弥陀より外に自己の絶対的に歸命信愛するものはなし。

——「人生の帰趣」 四五二頁——「無礙光」 七七頁——
——「ミオヤの光」 歸命の巻 三巻二一八頁——

(五) 或ル禪衲云ク仏本来在リ我方寸ノ中ニ何ソソ求メシヤ西方十万億ノ彼岸ニ

(五) 弁榮聖者の戒淨上人に対すると垂示。
或る禪衲とは禪宗第六祖慧能(639-713)のこと。
世に六祖大師、曹溪大師、大鑑高祖等と称する中国禪宗の大成者である。

今ハ曰ク^(一) 淨門ノ意念^ニ於^テ他^一仏^ニ作^ル於^ル自^一仏^ヲ

(二) 所念^ニ弥高遠^{ナレバ}能念^ニ心随^テ高遠

一心^ニ念^{ズレバ}仏^ヲ即^チ是^ノ心作^ル仏^ヲ若^シ得^{レバ}三昧^ニ是^ノ心是^レ仏

——「宗祖の皮髓」 口絵裏——

(三) 三千界中唯心眼の前に仏あるのみ

——「ミオヤの光」五番の巻 一巻二九六頁——「日本の光」 五〇頁——
——「お慈悲のたより中巻」 二一九頁——

(四) 弥陀身心遍法界 衆生念仏還念

一心専念能所亡 果満覚王独了了^(五)

——「日本の光」 五五頁——
——「道詠集」 二八〇頁——

(六) 其後は常に念に随て現ず。殊に朝日輝く方に向うて靈容の笑める大悲の御姿を想う時、靈感極りなきを感じければ頌うて曰く
我がみほとけの慈悲の面、朝日の方に映^{うつ}ろいて、照るみすがたを想おえば靈感極りなかりけり。

(一) ☆

75頁の脚註(一)

74頁の脚註(四)参照

(三) 91頁の脚註参照。

(四) 弁栄聖者の三昧発得偈。

(五) 「仏眼は自受用にて自ら現じ自ら感ず。能感と所感と自己にあり」

(弁栄聖者著「無辺光」講談社版 330頁参照)と同義である。

(六) ☆

(七) 明治十五年(1880)夏、聖者御年廿四才、筑波入山して三昧発得、悟の仏眼で、大ミオヤを勧請された

凭^かく心の宮殿に如来を本尊として信念する時は尊^{かたじ}く辱けなさを

感ず。斯く如来と離れざる親密の因縁を宗教の中心真髓と為す。

有ゆる靈の力は是より発動す。是が道德の原動力である。

——「ミオヤの光」第一卷第八号・二卷四〇頁——「仏法物語」一五一頁——

(七) 念仏者乃心本尊波六十万十億ノ奥行之堂

——「道詠集」二八〇頁——「日本の光」五八頁——
——「宗祖の皮髓」口繪裏——

(八) 能帰所帰性空寂 感応道交難思議

故我頂礼弥陀尊

——「ミオヤの光」靈鏡の巻 四卷三三五頁——
——「難思光・無称光・超日月光」二〇八頁——

(九) 自性は十方世界を包めども中心に儼臨したまう靈的人格の威神と慈愛とを仰ぐもあり。真空に偏せず妙有に執せず、中道に在つ

て円かに照す智慧の光と慈愛の熱とありて、真善微妙の靈天地に

神を栖^{たましい}し遊ばすは、是れ大乘仏陀釈迦の三昧、又我宗祖^(三)の入神の

処なりとす。冀くば識神^{たましい}を淨域^{じようど}に遊ばしむることを期せよ。

——「人生の場趣」三八七頁——「宗祖の皮髓」八一頁——
——「ミオヤの光」宗祖の皮髓の巻 二卷三二二頁——

時の道詠。

(八) 大ミオヤは宇宙の一切に内在すると同時に一切に超越していらる。その超在一神の汎神のミオヤについての聖者の讃歎。☆

(九) 三身四智の三昧の内容について聖者はかく述べられた。従つて中道論も法身の中心、粹としての絶対自身にして因果のない本有無作の報身について最厳密な初めてのものである。☆

(三) ☆

☆ 補 註

一ページ

(一)玄談——仏教では古来、人間に開発可能な一切の認識能力を五眼に分ける。釈尊は五眼を円かに開かれ、私共の師父弁栄聖者も亦これを豊かに開いていられた。(弁栄聖者著「無辺光」参照、講談社刊)現代の哲学、自然科学は人類進化の過程に於て先ず発達した肉眼(五感と理性)だけを真理認識の唯一の機能と誤解して他に天眼、慧眼、法眼、仏眼(何れも三昧の認識機能)のあることを認めようとしない。そしてこの根本的誤謬に気付くことなく、宗教に対しても肉眼の認識限界内で経論その他の文献と説法に示された所に基づいて或は歴史的文献学的に或は言語学的に専ら釈尊や祖聖の真精神を追求しこれを把握しようとしているが、世間と出世間の三昧、不完全帰納と完全帰納の三昧認識を厳密に区別して五眼明了の立場に立たぬ限り、所詮は空しい努力に終らざるを得ないと思う。

弁栄聖者は「大宗教家は衆生済度を第一とし、その真精神を述べることを

を第二とするから、大宗教家の説法必ずしもその真精神ではない。だから大宗教家の著述や説法を依り所としてその真精神を速断してはいけない。大宗教家の真精神の真相は深三昧に依って直観しなければ如実に覺らない」と言われた。事実ご自身、釈尊以後初めてだと云うことのできる善い道に依って豊かに三身四智の三昧を得てミオヤのお世嗣となられた。そして仏眼を「初步の仏眼、理想的啓示、三身四智の三昧、認識的一切智」の四位に分別されたが、一切を如実に直観する實力は、釈尊の認識的一切智に匹敵するものがあらせられた。「自分は経論に依って演繹的に説くのではない。帰納的に説いている」との聖者のお言葉は「これは完全帰納的」という意味だ。実に聖者は現代の釈尊に在す」と光明主義二祖笹本戒浄上人（1874—1937、東京浅草生れ。東京大学心理学科卒業、同大学院卒業。宗教大学教授、天台宗大学講師。大正二年弁栄聖者に値遇して三昧発得、聖者ご入滅の翌十年三月光明会総監に推戴、爾来遷化まで歴任。主な著書「真実の自己」「礼拝儀講話」「笹本戒浄上人全集」1、2、3以下続刊その他。）

は讃歎されたが、聖者はその明了な大円鏡智で相手の過去現在未来を一挙に直観し豊かな妙觀察智で其の人に適した対機説法をされた。従って宗侶対象の教学講習会等でも、たとえ「玄義」と聖者が言っておられても新しい酒を古い革袋に入れた様態の対機説法であるを免れ難い。故に世間一般の学者の態度方法によってご遺文を表面的皮相的に解することなく（文上）、その裏面に隠された聖者の三昧の実質内容、純粹の眞精神を徹底的に認識するようになければならない（文底秘沈）。聖者は純粹な光明主義の体系をまとめていられたが、それをご遺文に組織的に全般に亘って從來の聖浄二門の体系と嚴密に区別して明示する機会を得られなかった。

それで戒浄上人は師父面授の口訣を以て聖者の眞精神が正しく後世に伝わるようその生涯をかけて献身された。私共は今「自分の説法に対していゝ所ばかりを徹底的に選択しなければ無駄だ」との聖者のご嚴誠に些かでも報答するため、その眞精神のみ教に則って以下簡単な註釈を試みた。幸い大過なくして、本書のご遺文中より玉と石とを見分け玉だけをさっと選び

取る実力―択法眼を養う自他の一助ともなれば喜びこれに過ぐるものはない。

三

(三)個人生活、涅槃に帰して云々——このみ教の真に言わんとする所は、従来の浄土教から見た方便法身即酬因感果の報身ではない。私共が無余即無住処涅槃の实在解脱に帰入すると方便法身をもって自然界に出現して分身利物の活動をする身となることを示されたものである。方便法身は光明主義の厳密な意味では根本仏の分身として、度すべき衆生の住する世界に出現して表面的には衆生身として十方三世に活動する諸仏をさす。三身四智の仏眼を実現してから此の世を去ると、無余即無住処涅槃の境界がまざまざと実現する。すると無対光の「絶対無比の妙境は、便わち諸仏の住所にて、無住涅槃に在まして、常恒度生は自然なり」(本書三九頁参照)のみ教にある諸仏、即ち光明主義の厳密な意味での方便法身が無余即無住処涅槃界に於ける自己自身となる。

又「如来光明欲徳章要解」(聖堂刊)にある「然るときは即ち体は本覚の

都に在って化を百億に分ち、こゝに於て一切諸仏は即ち本覺の弥陀。弥陀即ち一切諸仏たるの真理は自ら証らん」(本書七一頁参照)とのみ教に於ける諸仏即ち上記の方便法身が無余即無住処涅槃の境界に実在的に歸入した時の私共自身である。

三

四報応二身を現じて——報身応身の差別の相と用は本体である法身無量光より発現することをお示しになったものである。此の報身は、自然界と心靈界の全体の根本仏——広義の報身をその一面である心靈界の御主人公として、単なる念仏の心本尊と仰いだ時の狭義の報身である。今此の報身の広狭二義についての聖者の御教示は次の通りである。

自然界と心靈界の全面の根本仏…広義の報身

心靈界の御主人公としての報身…狭義の報身

此の義は從來にない聖者が初めて明示下さったものである。

(五)無辺光(相大)——法身の中心である広義の報身の相大である。故に自然界と心靈界の全面の相大であるから、無辺光を従来言っている様な心靈

三

界の心本尊としての狹義の報身、相大と見るのは誤りである。

(二)彼此を絶して無対とす——自性清淨、有余、無余、無住処の四涅槃を通じて、三身即一の如来無対光の境界を(一)絶対無差別平等無相無色本来無一物本来無東西の面と、(二)無限の變化極らない妙色相好身の面の二面より見る。従来立場は最も程度の高いものでも、法身の理法と合一した悟の位の仏眼、理の無量光、無生忍(弁栄聖者著「無量光壽」二二九頁参照)を最高の依り所として、(一)を最高無上の彼此を絶した境界、即ち体大法身を宇宙最高の無対の真實在、(二)を第二位の仏身、即ち体大法身を最高の根本仏とし、妙色相好の報身を次位の真實在とする。光明主義は此の逆で、(一)を最高無上の真實在、(二)を(一)の体相用の中の一面である体として、法身を中心である絶対の報身を最高とする。その絶対中心の報身の自受用身が能動的に衆生の信念に応じて無量無限の變化を自発する御姿で、相對因縁因果の自他の差別を無限に発現する妙色莊嚴であると同時に、本来迷悟生仏の仮名を絶し、一切の規定条件を超越し、自他の一切の相對因縁因果の差別

を離れた絶対無規定で常住不變、絶対平等無差別自性清淨な彼此を絶した主客未分の妙色相好身に在ます事実を完全歸納的に三昧體驗するのが光明主義に於ける三身四智の仏眼、事の無量光（上掲「無量光壽」二二九頁参照）、無生法忍である。要約すると、罪惡生死の凡夫が此の世にいる間に大宇宙の最尊無上の根本仏と直接合一することが出来る様に全力を注ぐ。善い所ばかりを選択した一番いい見仏の道を直進して、罪惡生死の凡夫が修行の途中で信念の変更を要しないで此の世で三身四智の仏眼を実現する様に全力を注ぐのが光明主義の念仏の核心である。

吾

（二）内觀理想に傾きて云——報身と合一した心靈の生活と此の浮世の生活が融合調和して進歩向上するように精進し、この浮世の中で大ミオヤのお世嗣としての人格の完成と同体の大悲のもとに大慈悲の活動に励まなければならぬのに、心本尊を徹底的にお慕い申す燃ゆるが如き強い情操を欠くので理知に偏し、自力的聖道門的の内觀理想に偏して此の浮世の中に大ミオヤの大慈悲を具現することをうとんずる傾きがある。心本尊の報身の

ことをいう客観に「よ」即ち「世」と云う振り仮名を施されたのは「人格的御姿在ます絶対人格の報身仏をお慕い申す燃ゆるが如き慈愛の熱を欠き智慧の光に偏するので、その結果浮世の生活中に大ミオヤの大慈悲を具現するのをともするとうとんずるようになるので聖者があのような振り仮名をおつけになった」と戒浄上人は仰言った。

具

(一)今弥陀宗の玄義は云云——即ち換言すれば、「円融無碍の性具の事の三

千と事々無碍重々無尽の性起の一即一切の現象とが円満に統一調和した一つ一つの差別の現象が、即ち絶対自身で因果のない報身の全体である」。

このような大ミオヤの真義はどのようにしても円満に説明することは出来ない。それを聖者は「横超的宗教の客体の真義を円満に説明出来ない」と言っていられるのであるが、その大ミオヤの真義を明了に認識し正しく体験するには何うしたらよいか。それは認識的一切智に直結した直線道の見仏でなければ出来ないし、又直線道の五眼明了の道を益々広く深く進むの
でなければ、哲学心理学数学物理学化学生物学等の真意の正常健全な発展

は望めないばかりでなく、三昧力による所謂神変不思議な現象を正しく認識し体験することも不可能である。

六

(一)従来^云の浄土教の弥陀尊^云——一紙小消息は一枚起請文と共に法然上人の法語中の二大法語で浄土宗徒が宗意の規範として従来尊重し朝夕拝読するところのもの。その中に「十方に浄土おおけれども、西方をねがうは、十惡五逆の衆生もむまるるゆえ也。諸仏の中に弥陀に帰したてまつるは、三念五念にいたるまで、みずから来りてむかえ給うがゆえ也。諸行の中に念仏をもちゆるは、かのほとけの本願なるがゆえ也」とある。

五

(一)斯「經」に無量寿仏^云——今光明主義で広義の報身について「最尊第一」という場合は、真実在を論ずる実在論の嚴重な立場より見て「絶対的の最尊第一」である。広義の報身の能動的な無限の変化の面に於ける「絶対的の最尊第一」を明了に認識するのが弁榮聖者の光明主義の立場である。「中心、最上、真実、円満、絶対」についても同様のことが言える。

六

(三)弥々此の依身の報命^云——弁榮聖者の有余涅槃には(一)肉体を持ってこ

の世にいる時、(二)この世を去って一時的に浄土にいる時、の二つがある。

慧眼、法眼、仏眼が実現しても三身四智の仏眼の得られぬ時は、この世を去ると、肉体はないが如来化すべき肉の心が残っているために一時的暫定的に浄土に住する有余涅槃が実現する。そして如来のみ力で再び人間としてこの世に出て三身四智の仏眼を得る迄修行出来るようにして下さる。三身四智の仏眼を実現した後にはこの世を去ると、無余即無住処涅槃が実現する。開示悟の位の仏眼でもよい、仏眼を得て法身と合一してからこの世を去ると無余即無住処涅槃が実現するというのではない。私共が三昧の心でなく、肉の心ですらうと見ることが出来るのは此の自然界で、この肉体を持った私共にはこの自然現象界が実現している。三身四智の仏眼で報身と合一して、自然界と心靈界の一切の現象を、絶対の報身即真実の自己の依自起性として一切を自ら現じ自ら感ずる自受用の境界で認識するのは理想的に三昧直観する境界である。このような自受用の境界を得てからこの世を去ると、三昧の心で理想的に安住していた絶対自身の報身の最高の真実

在である妙境界が実在的に真実の自己の永遠不滅の住処として実現して来る。これが「光明主義の最終の目的と為る処」（本書六八頁の一行目）と聖者が言っておられる無余即無住処涅槃の境界である。

ぢ

(四)自然の約束を全く脱する能わず——慧眼、法眼、開示悟の仏眼の時にこの世を去ると、一時的暫定的に浄土の人となっても、再び仏道修行のためにこの人間世界に生れるようになる、この世で入の位の仏眼を得る迄生れ更り死に更りして修行するようになることを意味し、又入の位の仏眼であってもこの世に居る限りは物質的生理的制約を受けることを意味する。

望

(一)常恒に過去未来を統ぶる^云——主義上重要であるから再説すると、聖者が「即今当念弥陀合一の念仏」（本書七六頁の五行目参照）と言っている念仏は法身を中心である報身の核心に私共の心を正しく注ぐ念仏である。いくら命がけで念仏申しても、法身を中心である報身の核心に正しく私共の心を注がない念仏。それは現在当念を最重視する真実円満な念仏三昧ではない。

矣
四意に至尊をのみ憶念し——曲線道の慧眼、法眼、仏眼を雜念の三昧とし

て排斥して「よい三昧ばかりを得さして頂きたい」と心本尊にしかとお願い申して、本より相好円満な絶対の報身の慈悲の聖容を、「所念弥々高遠なれば能念の心随って高遠」（本書九四頁の二行目参照）の道に則って憶念一向に、入の位の仏眼が開き始めるようになって初めて、弥陀三尊を拝む、極樂で諸菩薩に説法しておられる大ミオヤを見奉るという道を進むことである。併しこのみ教を嚴重に実行する者が全部この世でミオヤのお世嗣になることは出来ない。だからといってこの世でミオヤのお世嗣になるように全力を注がないならば、それは一種の未來主義である。この世で三身四智の仏眼を實現出来るか否かは如来にお任せ申して、そうなり度いと思つて一番よい見仏の道を直進する。これで初めて現在より未來に向う一歩一歩が、一念弥陀なれば一念の仏、念々弥陀なれば念々の仏の道を正しく進む一歩一歩になる。

公
（五）日蓮——日蓮宗の開祖。（1222—1282）天台宗と異なる事の本門開顯を重視

した法華信仰を首唱し、唱題成仏を主張した。殊に諸宗を破折し、幕府を攻撃して屈しなかったので、しばしば流罪に遇い斬罪にも処せられようとした。晩年は静かに身延に退隠して、衆徒を教養し、述作に尽瘁した。

由来、東西古今の哲学、宗教を通じて「平等の本体の方を高く深いもの」と思い、差別の現象の方を低く浅いものと見る」のが普通である。従って仏教一般の体系でも、従来の聖道浄土を通じてこの立場である。併し乍ら、本体の法身の平等の形式の方面―理よりも更に高く差別の現象の内容の方―事を重んじる体系がある。弘法大師、日本中古の天台、日蓮上人の教えはこの後者の事の法門の系譜である。光明主義も亦この体系であって、「本体から現象を見る、理から事を見る」のでなく、「直接絶対的根源的現象態の無限の変化の中に、絶対の報身は完全円満な根本仏に在ますが故に、常に同一で不易である事実、並に平等の理を見る」立場であるから、歴史的にここに初めて最高の三昧体験に基いた円満な事の法門が聖者によって完成されたと言える。

(一)淨門意念ニ於佗仏云——聖者は禪淨（又は聖淨）二門で教祖釈尊のみの哲學的方面と宗教的方面を代表されたので單なる禪宗や淨土宗真宗を指すのではない。ここで言う淨土門とは大宗教家としての釈尊の眞精神としての純粹円滿な淨土門・宗教を意味する。従つて「是心作仏、是心是仏」も從來の淨土教の立場からでなく、聖者正眞の眞精神より見なければならぬと戒淨上人は注意された。

(六)其後は常に念に随ず——これは聖者がお年廿四才慧眼法眼明了に開けて後のご境界で、ついで筑波入山仏眼を發得された。仏眼を得ると如来の相好を見奉っていない時はこの身この儘が絶対、この身この儘が宇宙である。今見奉り度いとお念じ申すと念に應じて慈悲の聖容を見奉ることが出来る。その自由を得て、如来といつても離れないようになった心の境界が宗教の中心眞髓である、一切不思議の力はこれより發動する、これが道徳の源泉であると聖者はご自身の実地体験済の事実として言われた。

(八)能歸所歸性空寂云——最尊の如来即眞実の自己であり乍らお慕い申す

と無限にお育て下さる。故に謹まざるを得ない、敬せざるを得ない。この心本尊と私共との内在、超越の關係即ち宗教的客体と私共主体との三昧を得た境界に於ける内在、超越の關係については、曾って大正九年三月知恩院での別時滿願の日、聖者が戒淨上人に「能礼所礼性空寂、感応道交難思議、故我頂礼無上尊」という中国のよく坐禅した居士の言葉を引用して「ここまで坐禅もやらなければ駄目だ」と申され、当時この問題について抱いていられた上人の心中の疑問を知つての上の聖者のこの説法で、上人の疑問は立ち所に氷解してしまつたという有名な逸話がある。

(H)又我宗祖の入神の処云——弁栄聖者は「大宗教家は衆生を濟度することを第一として、自らの眞精神を説くことを第二とする。釈尊、善導大師、法然上人も大宗教家としてこの態度をとられた。その眞精神は仏眼によって、しかと認識しなければ如実には分からぬ」と仰せられた。淨土宗の開祖法然上人は善導大師と同様その晩年三身四智の身となつていられたので、聖者はその絶対弥陀の密意を明示して宗徒の自覺と奮起を促された。

弁栄聖者略伝

大ミオヤの無尽の大悲に催おされて、此の土に輝き出で給いし弁栄聖者は、
安政六年（1853）二月二十日下総国鷺の谷しもふさのくにの念仏者山崎嘉平氏の長男に生を受
け給う。家に在りて農事に励み學業を好むこと世の常ならず、十二才の時弥陀
三尊を空中に想見して憧憬あこがれの念に堪えず、竟に明治十二年二十一才にして出家
の素志を遂げ、近村東漸寺の碩学せきがく大康上人に師事し、毎夜熟睡三時間の外は雜
用に學問に忙しく、貫くに念仏一行いちぎょう昼夜断え間なく、或時は手の平に油を入れ
之に浸したる燈心を燈し、或時は腕の上に線香や蠟燭を燈して仏前に供え、以
てその忍力にんりき仏道修行に堪え得るやを試し給う。東京に遊學してかずやま山上人に就き
て華嚴けごんを修めし央なかばには法界觀の三昧さんまい円まどかに現前し、明治十五年筑波山に籠り
て至心念仏の曉には見仏三昧了々と発得はつとくし給う。爾來一挙一動全く仏法に相応
し、施、戒、忍、進じん、禪、慧、欠くることなく、大康上人の意を継いで五香に

新寺創立を志し明治二十七年本堂落成に至るまでは、雨漏る廃屋あばらやに夜も灯無ければ線香の火を頼りに聖画を描き、嚴寒にも重ね着せず藁わらを積んで蒲団ふとんとなし、超然ゆみようとして勇猛ゆうもつに称名し給う。建立こんりう寄附きふも一人一厘いちちえんの結縁けちえんとして遠近あんを行脚ぎゃく中若し貧窮者に遇えば月日重ねて喜捨を積みし金米全部之に施して更に又一厘より勸進を始め給う。途を踏むに蟻は勿論若草までも懇ろねんどに之を避け、大康上人ふいんの計音けいおんに接しては即座に別行に入いって不臥念ふみ仏ぶつ一百日に及び給う。更に一切経を読了し、明治二十七年印度に渡りて大聖釈尊みあとの御蹟ごせきを巡拝し、帰朝しては東西に巡教し阿弥陀經図絵を施し給うこと二十五万余部、普く米粒名号を施してかりにも一声称名の縁を結び給うこと実に無数なんげ、難化うえんの有縁うえん一人の為にも数年方便して猶措おかず、寺の礼遇ことわを辞り態々下男室げなんべやに夜を明して勸化の縁を求め、夜寒の町に貧者を訪れては当日供養をうけし下着を脱ぎ与えて如来の大悲を喜びあい給う。日毎夜毎の伝道に疲れし色もなく忙中に僅の閑を得ては如来

の尊像教化きようけの御文に筆を運び、汗血のにじむ慈悲しずくの雪が幾千枚、その奉謝の金は悉く会堂の創建となり学園の創立となり数万の文書数十万の礼拝儀の施本に充て給う。食卓の上浴室の中至る所皆説法の道場にて、一所不住の年中巡教極寒極熱一日の休養もなき間に宿所の縁に随つては古今の書籍近代科学に至るまで孜々ししとして研め給い、又画、歌、音楽、五筆の書等諸技悉く利生りしようの方便ならざるなし。靈応内に満ちて、念々不捨寢息まで自ら称名する程なりし間にも説法に非れば読書、読書に非れば、書き物、実に一寸の光陰も為すこと無くして過し給うことなく、集る淨財は悉く利他の用に供えて反古紙一枚ほごがみをも節約してその裏に原稿を書き給う。一切の時一切の処、ただこれ仏作仏行、寸隙すんげきなきその御行狀に接しては初め尊大に構えし人も皆恭敬くぎようして其の教に額ぬかずかざるなく、諸宗は勿論耶蘇教ヤソきようの牧師に至るまで発心ほつしんしてその門に入る。首唱し給う光明主義の光万民に被る所、念仏三昧各地に盛に行われ、入信の行者幾万皆悉く値遇の御恩に感泣して尽未來際の願行に奮い立つ。越えて大正九年（1920）吹雪に

更くる北越の夜寒身に泌む勸化の旅に老いの御声に尽きぬ如来の御慈悲を伝えて最後の三昧会を木枯悲しき柏崎に導かれ給いし十二月四日遷化し給う。

仰ぎおもんみ惟れば内証甚だ深く外用げゆう亦広大に、全分度生の無我の力が無作むさの精進に顕れ給う弁榮聖者の御一生は、如来光明のさながらの反映に在せば、誰か大慈悲の靈応を仰がざらむ。誰か光明の摂化を信ぜざらむ。

— 田中木又謹誌 —

あ　と　が　き

光明主義の本部道場を設立しようと発願されて芦屋の地に聖堂が出来たのは未だこの国が敗戦の混乱と混乱のさ中にあった昭和廿三年の春であった。爾来大ミオヤの照護の下、風雪によく堪えてその創立廿五周年を迎え、その記念としてここに「光明主義玄義」を刊行する。曾て田中木又先生（1884年長崎県五島生れ。東京大学英文科及哲学科（美学）卒、同大学院卒。宗教大学及慶応義塾大学教授を経て現在光明会顧問。弁栄聖者のご遺文編集に一生を捧げられる。主な編著書「弁栄聖者光明大系」「同ミオヤの光」「日本の光へ弁栄上人伝」その他。）の編集によって大正十二年四月に刊行されたミオヤの光「玄義の巻」を主軸に聖者の御遺文集全般からこれに類するものゝ集大成が本書である。

実は昨年二月木又先生御重態の報を信州上諏訪の光友上条次郎氏より頂いて急遽先生宅にお見舞に参上した時、直接先生より「玄義の巻」と「安心問答」等御遺文再版の御了解を頂いたのであるが、先生は幸いその後小康を得られたものの何分来年九十才を迎えられる御高齢のため、これ迄のように校訂についての細部のご高示を仰ぐことが出来なかつ

た。然し、本書が「玄義の巻」の単なる復刻としてでなくこのような集大成のものとして刊行の運びに至ったのは、偏に光友諸兄弟の熱烈な要請とそのご清援の賜物である。今このことを記して深く謝意を表する。

願わくはこの難解の書が広く大衆に愛読されて現代の物質文明の闇夜を照す自灯明法灯明の機縁とならばと、ひたすらに祈念しつつ。

昭和四十八年十二月四日

師父聖者と正忍に

杉田善孝

光明主義の宗要に就いての返簡

光明主義の主要特徴

光明主義の宗要に就いての返簡

質問者・和田真澄

添削・笹本戒浄上人（ゴチック体の部分）

起行の用心

（問）「一枚起請文は安心起行の形式有つて内容なし」 之で宜しう御座いますか。

（問）「弁栄聖者の仏陀禪那と御仰せられしは釈尊の禪定三昧である」との御精神を御示しになったと拝察申上げて宜しう御座いますか。

仏陀禪那とは徳本行者が「南無阿弥陀仏の異名」と仰せられしと同意味と拝察仕候

（問）光明主義起行の用心として

（一） 摂法は御相好。 ミオヤの慈悲の聖容^{ミカホ}をおもひ御慕ひ申してナムアマミダ仏

（二） 念仏の所期は見仏して（成仏）。 聖嗣^{オヨツギ}となりたし

（三） いづ迄も御慕し奉る。 ミオヤに対する愛慕に三期あること御承知の如く候

（問）光明主義にのみよつて解決せられる六ヶ条

一、十二光仏

二、三十七道品

三、縁起実相を統一調和せる王三昧——弥陀三昧

四、念仏の初発心より見仏して成仏、無限に向上さして戴だく終りまで信念の変更を要せず

五、無明

六、主観客観いづれに偏^{カクヨル}してもタンパンカン

*

昭和四、五年頃、当時東北大学理学部物理学科の学生であつた泉虎一氏（元旧制第四高等学校教授）は最初、松山市大林寺住職大島玄瑞師より光明主義の六大特長に就いての話を聞かれ、それを同じ仙台住の和田真澄師に話された。和田師はそれを確めたく直接戒浄上人に呈上、御教えを仰がれた。これに対して上人は朱墨で添削の上、昭和五年十一月二日付で同師へ返送下さつた。それが本稿である。原本はすでに紛失、『傀儡草』（昭和十二年十月。光明会聖堂教学部刊、昭和五八年八月第三版覆刻）所載のものだけであつたが、今回杉田善孝師書架より、同師が和田師と洛西高雄光明修道院に修道中、書簡を原型通り筆写されたメモが発見されたので、ここに発表した。ただし、後日戒浄上人は泉氏に「あれは不十分、不完全なもので、光明主義の特長の全部を厳密に述べたものではない」旨申されたことを付加しておく。

——「根本戒浄上人全集」下巻 四四〇頁—四四一頁——

光明主義の主要特徴

光明主義の首唱者仏陀禪那弁栄聖者（1859～1920）は後継者である笹本戒浄上人（1874～1937）に「私は聖典に依て演繹的に説くのでない、帰納的に説いている」と申された。即ちそれは聖典の教える所に基いて演繹的に説くのではない、聖典に書いてある如來の事實、如來の真理の法則を纏めて光明主義の教学体系を組織したのではない。自分の体験に基いて帰納的に如來の真理を説く、自分の体験された如來の事實から帰納的に光明主義の教学体系を組織したという意味である。

有限回数 of 三昧体験によつて大ミオヤの真理法則を直観し、大ミオヤの真相を認識するのに、不完全帰納と完全帰納の二つの場合がある。

体大法身を根本仏とする立場は、大ミオヤの体相用の一切が本より円成実性の真実在である事實を認めない体系であるから不完全帰納の三昧直観である。

弁栄聖者は三身四智の仏眼を豊かに実現して、法身の中心である内的目的論的報身を真実の自己とする御境界で、絶対円満な真実在である無量光より超日月光に至る十二の光明の一切と合一しておられた。それで有限回数 of 三昧体験によつて、絶対の報身の真実を完全帰納的に三昧直観せられた。聖者は三身四智の仏眼で、応身仏釈尊が円満な三身四智の仏眼を実現して、御自身の本仏である絶対の報身の核心に直結する最尊

の見仏を衆生教化の中心とせられた事実を如実に認識して、光明主義に於ける見仏の道として御教示になった。

光明主義の見仏が晩年に三身四智の身となっておられた善導大師、法然上人の真精神であり、光明主義に依つて各宗各派の祖師の精神が生かされるというのも、弁栄聖者の真精神の御教示が三身四智の仏眼による完全帰納的な御教えであるからである。

今、慶応義塾大学教授田中木又先生（1884～1974）がライフワークとして集大成された聖者の膨大な御遺稿集『光明大系』の山塊は、一見幾重にも重なりあうこの地球最高のヒマラヤ連峰にも喩うべき巨大な山並みであつて、果して幾峰に分け得られるか、これはなかなか至難の業ともいうべきである。かつて伊予の松山大林寺の聖者直弟子大島玄瑞師は昭和三、四年頃から五年にかけて、いみじくもこれを六つの峰に分けられた。これが今日、世間に流布している「光明主義の六大特長」である。（全集下巻四四〇頁参照）

ただし、後日戒浄上人が「これは光明主義の主要特徴の一部分である」旨申され、上人直弟子達に庭訓の中よりこれを補完すべきを密かに希望された。それで今日まで泉虎一氏をはじめとする上人直弟子達の纏めた上人指南広録の中より、師父聖者によつて初めて開闢された「光明主義の主要特徴」を選び、その語要を左に列挙して、敢えて有縁無縁の光友諸兄姉の法鑑に呈することとする。

一、所帰の本尊

(1) 如来の自境界より大宇宙の真相を見る時は、大ミオヤの体相用の一切は本より絶対円満、不生不成無作無

為の真実在で、無始以来無量光より超日月光に至る十二の光明の全徳が顕現しておる絶対界に在まして永恒自存しておられる。この大ミオヤが私共の信念に報いて光明摂化して下さる心本尊という面より拝して、三身即一に在ます本有無作の内的目的論的報身と仰いでお願い申してお念仏する。

(2) 報身——広義と狭義

(イ) 広義の報身——大宇宙全体の絶対中心としての超在一神の汎神に在ます大ミオヤ。本より独立自存する大宇宙全一の絶対的現象態で、自然界と心靈界全体の根本仏。又これを本有法身、法性法身とも申し上げる。(註、自然現象と心靈現象の根底としての広義の法身のことではない)したがって方便法身は応化身、即ち釈尊の如き人仏教化身を申し上げることとなる。

(ロ) 狭義の報身——心靈界の主本尊としての報身。(註、自然界の根底としての狭義の法身と対応する)

二、十二光仏

円成実性の真実在である無量光から超日月光までの十二の光明は、自然界と心靈界の全面を含んだ広義の報身の光明である。

三、報身如来蔵性

従来は円成実性の真実在である体大法身を大宇宙の心靈と自然の一切の差別の現象の根源として、法身如来蔵性を説く。この立場で平等即差別を見る。

光明主義では法身の中心である絶対の報身の独立自存する大宇宙全一の円成実性の妙色相好身を大宇宙の心霊と自然の相対因縁因果の一切の差別の根源として報身如来蔵性を説く。この大宇宙全一の円成実性の妙色相好身の一切の規定条件を離れた絶対不変、無差別平等の面と大宇宙の相対因縁因果の無限の変化の差別の面で、平等即差別、真空即妙有を見るのが光明主義の固有の立場である。

四、光明主義の念仏は成仏の中心道、直線道としての念弥陀三昧・王三昧である

(1)縁起と実相を統一調和する故

絶対の報身御自身の無量光より超日月光に至る十二の光明の一切が本より絶対円満な真実在であるから、空間的な実相と時間的な縁起が統一調和する。体大法身は円成実性の真実在であるが、如来の相と用の差別は体大法身の理法に規定せられる立場では、縁起と実相の完全円満な統一調和はあり得ない。

(2)理感二性を統一調和する故

無量光より超日月光に至る十二の光明が本より円成実性の真実在である。即ち理性と感性は同位の絶対円満な真実在であるから、理性と感性が円満に統一調和する。体大法身は円成実性の真実在で差別の内容である感性は体大法身の絶対理性に規定せられるのであれば、理感二性の円満な統一調和はない。

(3)平等と差別、真空と妙有のいずれにも偏しない中道故

心に想い上げておる報身の慈悲の聖容は、自分の信念に相応した相対因縁因果の差別の妙色相好身（妙有）と感じながら、実に一切の規定条件を離れた絶対不変の真実在である平等の御姿（真空）だと直観す

る。平等と差別、真空と妙有の何れにも偏しない、平等と差別、真空と妙有が融合統一した念仏である。

(4)主観と客観のいずれにも偏しない中道故

心に意識せられる絶対の報身の絶対不変の真実在である妙色相好身を真実の自己の色身と感じながら、心本尊としてお慕い申すとしかとお育て下さる。即ち主観と客観のいずれにも偏しない念仏である。

(5)感覚感情知力意志の四方面の最高統一態である絶対の報身の十二の光明の全徳の顕現である其の慈悲の聖容を念ずると四方面が円満に調和する故

(6)三身即一の本有無作の報身を心本尊としてお慕い申しお念じ申す故

(7)光明主義の見仏は無辺光の四智の全般より三昧入神する。詳説すると十二の光明が融合統一しておる核心より三昧入神する故

(8)一切の凡夫が五根五力の第一歩より認識的一切智を得る終りまで修行の途中で信念の変更を要しない万機普益の最勝最易の見仏故

五、成仏の中心道、直線道としての念弥陀三昧の三十七道品

絶対自身の報身仏の円成実性の体相用が、三十七道品に依て示されている凡ゆる修行法と副次的目的を統一し秩序付けて、終局目的である認識的一切智を内的目的論的に私共が実現する方向に帰趣せしめている。

六、入信の暁より認識的一切智の夕までの靈育の過程

成仏の中心道、直線道により途中信念の変更を要せず、五根五力の第一歩よりお育てを蒙って、三昧が次第に深くなり遂に認識的一切智を得るまでの経過を開示悟入の方面から具体的にお教え下さった。

開・先に慧眼が完全になり、次に法眼が完全になって、この二つが融合統一して初歩の仏眼を得た所が
感覚的啓示の満位

示・初歩の仏眼が次第に深くなるにつれてミオヤの大智慧と大慈悲の内容と次第に深く合一するようになる。ある程度までミオヤの大智慧大慈悲と合一したところが写象的啓示の満位

悟・さらに進んで法身全体、特に法身の理法と合一した所が理想的啓示。無生忍

入・ミオヤの体相用の一切が不生不成無作無為の真実在である事実を認識した所が無生法忍。三身四智の仏眼の境界。そしてその満位が認識的一切智

七、三身四智の仏眼における一切智を觀念的一切智と認識的一切智の二種に區別する

「この世界で認識的一切智を得ておられたのは釈迦さんばかりだ」と教祖釈尊の三昧の内容を、弁栄聖者はこの地上で人間の生理状態が仏化せられた極地の状態の実現として明了にして下さった。

八、往生について二種あり

(1)理想的往生、または精神的更生、有余涅槃

慧眼、法眼、仏眼が開けて、肉体を持つてこの世にいる時と、この世を去って一時的に浄土にいる時の

二つの場合がある。慧眼、法眼、開示悟の位の仏眼でこの世を去ると、肉体は無いが未だ肉の心が残っておるために一時的に極楽における状態が実現する。

(2) 実在的往生、または身体的更生、無余涅槃

三身四智の仏眼を得てからこの世を去ると、実在的に絶対の報身の大宇宙全一、絶対無規定の妙色相好身と合一して、無余即無住処涅槃が実現する。

九、安心起行論について

(1) 心行の形式と起行の用心との二種分別

中心道の心行の形式を重要視するのは勿論であるが、人格完成に全力を注ぐ立場より、起行の用心をば更に重要視して、大ミオヤのお育てを正しく蒙ることを最重視する。

(2) 中心道、直線道の起行の用心に関して

(イ) 中心道の信念に反する一切の廻り道の信念と雑念の三昧を排除する。

(ロ) 用心を総別に分つ。

(a) 総の用心——本有無作の報身と確と合一してお世嗣となるため、ミオヤをいつもできるだけはつきりお慕い申し、いつもその慈悲の聖容をできるだけ大きくお念じ申す。

(b) 別の用心——五根五力と開示悟入の各段階において、現実に自己の心境より一步高い所を当面の目標として精進する。

い中心道の起行の用心により修行している時の三昧の正邪の判断について。

(a) いつも慈悲の聖容をできるだけ大きくお念じ申しておるように努力する。

(b) 信念が完全でも明相、花、景色等を見、香を感じる等は修行未熟のため。

平等に偏した慧眼、極楽ばかりを見る三昧、慧眼法眼の時代に依正共に見る三昧等は信念が不完全でお慕い申し方不徹底のため。絶対の報身の慈悲の聖容を専念して、三身四智の仏眼が開け始めるにつれて初めて弥陀三尊を拝する等の三昧に入るように精進する。弁栄聖者のお言葉の如く「自分は極楽ばかりを見たことがない。仏眼を得てから極楽を次第にはつきり見るようになった」というのは、人格完成に全力を注いでおる証拠。この御聖語は特に重要である。

(3) 一切の凡夫見仏可能の道

(イ) 雲の上に上半身お示し下さった如来様を平面的にお書き下さって、念弥陀三昧を修する時の心本尊という意味で「三昧仏」とお名付けになった。そして「その慈悲の聖容全体に心を注げ。開目閉目これを努めよ。また三昧仏を一定せよ」とお教え下さった。

(ロ) 「所念^{いよいよ}弥高遠なれば能念の心随つて高遠」のみ教えを五根五力の第一歩より如教奉行する。

十、徹底的な選択主義

私共がどのような信念でお念じしても、如来は大慈悲のミオヤに在ますから、いつも正しい三昧ばかりをお与えになるかというと、「そんな宇宙の法則を無視したことはなさらない。大慈悲のミオヤはまた実に神聖

と正義のミオヤに在ます。ミオヤは宇宙の法則に従つて私共の人格を完成して下さる。私共を御自身の全きが如くに円満な仏にしたい、というのがミオヤの聖意^{みゐ}で、故に成仏の目的に適わない一切の三昧を捨ててい所ばかりを引つこ抜いて早くお世嗣と成るようにするのがミオヤの聖意に適う所以^{ゆゑん}だ」とお示し下さった。

十一、縁起論

(1)物質現象の発現について

(2)無明について

古来何処から発現するか不明であつた無明と報身仏の体相用の關係を初めて明確に示し、従つて不明瞭であつた自然現象と心靈現象の発現の仕方の相違点、またそれぞれを規定する理法の相違点も明白にされた。これによつて報身の心靈差別の現象が本有無作で、人間の宗教的信念の創り出したものでない事実、仏教で説く自然現象生起論と現在並びに将来の自然科学の立場から論じる自然現象生起論と総合調和する道が切り開かれた。

十二、無生法忍における真理の認識を自然科学的真理の基礎認識、根本認識とする

この立場に立てば今後いかように自然科学が発達しても、光明主義によつて科学を統一総合することができる。自然科学のみならず一切の学問芸術等についても同様のことがいえる。

十三、光明主義は理性主義と感性主義を総合調和した光明摂化主義である

これを縁起と実相の面より見れば、縁起と実相を総合調和した円満な教え、即ち円具教である、ということができる。

理感二性については今は暫らくおく。従来の空間的実相論や時間的縁起論はおよそ不完全で、超在一神の汎神教の立場からいえば、大ミオヤの絶対無規定の体相用が発現するのに、

- (1)自然界と心霊界、並びに衆生にどのように顕現するのか
- (2)顕現するのを如来の面からと衆生の面からと區別して
- (3)空間的実相論と時間的縁起論を総合統一しなければ十分といえない。

しかし、このように説いたとしても完全円満にしかも如実に如来の事実を昼夜一劫しても説き尽すことはできない。

以上、弁榮聖者によって開顕せられた法門を一往十三峰に分けたが、浅学菲才にして信外輕毛の輩、全般に亘つて浅略粗笨の点多々あるを懼れる。しかしもとよりこれ斯教宣揚の微忱に出ずるもの、折角諸先輩の御叱声と御高示を賜れば、幸甚これに過ぎるものはない。またこの『上人伝』に初めて接せられた方々には『笹本戒浄上人全集』上中下三巻がすでに刊行されているので、是非直接それについて御研究下さるよう冀求して止まない。

『笹本戒浄上人伝』編集部監修 杉田善孝

ワイド版のあとがき

本部聖堂創立廿五周年記念に『光明主義玄義』を刊行してはや廿二年、茲に光友有志の発願によってそのワイド版を刊行することになった。この機会に、

(一)誤植とレイアウト(割り付け)の訂正。

(二)脚注の追録。

(三)「光明主義の特徴」について二種の文献の追加(『笹本戒浄上人全集』下巻四三九頁及び同別巻五四四頁参照)

等を行った。即ち、

(一)本書三六頁一行目の「本〔仏〕」を「本体」と訂正。但し、仏眼四位のうち、悟の位の仏眼では、広義法身と形式的に合一する。入の位の仏眼では、広義法身と内容的に合一する。図示すると

悟の位——形式的合一——無生忍

悟の位では法身の平等の理法が不生不成無作無為であることは認識できた無生忍の境界であるが、報身の差別の理法の不生不成無作無為であることは認識できていないから、形式的合一である。

法身全体と合一

入の位——内容的合一——無生法忍

入の位では報身の差別の理法が不生不成無作無為であることが認識できると無生法忍の境界であるが、悟の位の時には合一できなかった法身の最深の面と合一できるようになる。これを戒淨上人は「内容的合一」と言っていた。

即ち大ミオヤの体相用の一切が絶対無規定である事実を認識した境界が無生法忍である。それは平等と差別の一切の理法が不生不成無作無為である事実を認識した境界である。心靈界と自然界の一切の現象が、一切の根本仏、絶対の心本尊で内部のみあって外部のない広義報身の自発的能動的発現である事実を如実に認識する。なお上記の無生忍、無生法忍の説は光明主義別途（独特）の義である。併せて本書五頁の（三）の脚注も参照のこと。

つぎにレイアウトの訂正については、これを省略する。

(二)の(a)本書五六頁の(一)の脚注及び一〇三頁の補注を付加すると、

聖道門は自己の修行に依り、絶対根底の法身を開發して、自己の發願修行に報いて時間的因果的に因位より果位の仏に成ると言う立場であつて、人格的の心本尊をお慕い申してその光明摂化を、横超的空間的に仰ぐというのではない。

淨土門は横超的宗教の立場で、人格的の報身を心本尊と仰いでお慕い申しお念じ申すと、心本尊の報身が私共の信念に報いて、目的論的、空間的に私共と合一して下さる、如来が私共と成つて下さる、と説くのが光明主義より申すと淨土門としての普通の説き方だと言える。

しかし共に不完全、不十分な説き方である。弁榮聖者が光明大系『人生の帰趣』第四版一九頁で「此両主義は各一方ずつを主張するけれども、それぞれ全く分業的に発達したので、実には人の性と能とには両面を各自は具有して居る故に、完全なる宗教は両主義を合一したる処にあり。」と言つておられるように、従来の聖道門と淨土門を総合統一調和した円満な超在一神的汎神の光明主義より言ふと、

ミオヤの絶対無規定の体相用が、自然界と心靈界並びに衆生に、どのように顯現す

るか、その顯現の仕方を、如来の面から見た場合と衆生の面から見た場合に分けて、はつきり説いて、空間的に実相論より見た面と時間的に縁起論より見た面を統一調和して、三身即一本有無作の報身が、空間的目的論的に私共の信念に報いて私共と合一して下さる、如来が私共と成って下さる面と、本有無作の報身の目的論的絶対能動のお育てを被って、私共が自己の發願修行に報いて時間的因果的に、因位より果位の仏に成る面を超在一神的汎神の立場から、総合統一調和して説かなければ十分な説明とは申せない。しかし此のように説いても、如来の事実、主体と客体の關係を如実に完全円満に説き盡すという事は不可能であるから、弁榮聖者が『ミオヤの光』不二の卷や三宝の卷で、あのように（注、「時間空間を以て主体と客体との區別をなすも其の真義を円満に説明する能わず」）申された^{すがた}と信じていると戒淨上人は申された。

(二)の(b)本書九二頁の(二)については、キリストの相を最高真実の神の相と仰いでいる人にとっては靈応身と言える。但し、私共人間は相対的現象態で、乳兒↓幼兒↓少年↓青年↓成年↓老年と年をとっていても、一つの定相^{じやう}しか持つことができぬ。然し、報身大ミオヤは絶対的現象態であって、隱顯出没自由自在な無量の定相を、一即一切

の状態で持ち給う。そして衆生の信念に相応した人格的相を衆生の心想中に発現する円満な大靈力を持っていられる。或はキリスト教的、或は回教的な人格的相の相を発現して、衆生をそれぞれの道に従って済度して下さる。このように、三昧中に拝する本尊の差別の相は「主観的客体である」と弁榮聖者はおっしゃった。或はキリスト教的、或は回教的な天国の相などもそれに準じる。

結びの言葉

本書三六頁の八行目に「吾人が学説は宗教進化主義なり。科学と調和しすべての進化せる宗教と致一せざるべからず」とあるように、高等宗教は一神教より汎神教、汎神教より更に超在一神的汎神教へと進むのが宗教進化の法則であると言えるが、従来の一神教や汎神教の教義体系では、自然現象と心霊現象の発現の仕方の相違点、それぞれの現象を規定する理法の相違点が明了に区別されていない。そのため、(一)報身の心霊差別の現象が、絶対能動的に発現する本有無作の現象で、人間の宗教的信念の創り出したものでない事実を

明了にして、広く一般的に五眼（肉、天、慧、法、仏の五眼の認識機能）の立場から、哲学、自然科学、文学、芸術等を総合統一調和して研究することができない。（二）高等宗教で説く自然現象生起論と現在並びに未来の自然科学の立場より論ずる自然現象生起論等とは総合調和の道がない、と言える。

上記したように、無生忍の悟の位の仏眼では三身即一、本有無作の報身の本体の法身全体、特に法身の理法と合一した境界であって、大ミオヤの理性、平等、形式の面としかと合一した所。一切の現象の本体の法身が、円成実性絶対無規定である事實は如実に認識できたが、大ミオヤの相と用、即ち本有無作の報身の心靈差別の現象の一切が、隠顕出没変化極らない現象でありながら、しかも円成実性絶対無規定である事實は未だ如実に直観できない。無生法忍を得て入の位となりミオヤのお世嗣と成ると、三身即一、本有無作の報身全体と合一して、大ミオヤの体相用の一切が、円成実性絶対無規定である事實を如実に直観する。そして三身即一、本有無作の報身全体と合一した境界が、一切の宗教の中心真髓、一切の学問の核心である。この中心真髓、この核心を明了に説いた仏身仏土論と一切の凡夫が修行の途中でなんら信念の変更を要せず、三身即一本有無作の報身と合一できる

修行方法が明らかに示されているので、光明主義は一切の宗教、一切の学問を包むと同時に、これらを超越した真実の宗教であると申すことができる。これが戒浄上人のみ教の結要である。

ひるがえって思うに、私共が今息づいている此の廿世紀（もう数年で終わるが）は肉眼（感覚と理性）の世界ばかりを實在とし、肉眼以外に實在と真理を認識する機能はないと考えている人達が多数派（マジョリティー）となり、肉眼以外の三昧による認識機能を認める人々が極めて少数派（マイノリティー）となった特記すべき時代と言える。しかもその少数派の中には三昧に有漏と無漏（注、漏は煩惱のこと）、世間と出世間（注、世間は梵語ローカ^{ローカ}、壊れるべきものの意）の区別あることを知らず、また三昧の正邪分別の仕方にも無知のため、世紀末の世界に種々のトラブルを惹起しているのが昨今の現況である。

望遠鏡や顕微鏡を利用するにせよ、私共の認識に入り来る限りは認識界である。マクロからミクロのコスモスまで、私共の認識界は随分広まったが、認識が記述から説明へと、予備から発達の段階へと到達しても、かかる認識にかかわる理性をカントは理論理性と呼んだが戒浄上人が「相対的な肉の心に依存する理性には、疑う心を取り除くことはできぬ

から、動揺するのが本来の性である。従つてこのような理性には、真理を正しく認識する能力はない。真理か非真理かを正しく判断することは不可能である。」とおっしゃった。イギリスの天文学専攻の物理学者エディントン (A. S. Eddington 1882—1944) も「将来いかに自然科学が進歩しても、数学解析の結果と比較して、今観測している光が、宇宙を何回廻つてきた光であるかを、判断することは不可能であろう、かく考えると、永久に自然科学は仮定、仮設の域を脱することは不可能である。自然科学は正しく真理を認識することができない。自然科学という真理は、仮定仮説の域を脱し得ない。」と言っている。また哲学でいう真理や、真理の規準も諸説紛々で帰する所を得ないのが現状である。

この時に弁栄聖者出でまして、五眼一般、肉眼特殊の立場から、分別次元の葛藤を切り開いて靈性的直覚の世界に直入することを得しめられた。それで戒淨上人は「弁栄聖者は超一流に在ります。実に現代の釈尊に在ります。」と讃歎されたのもこの理由からである。そのかみ、仏陀釈尊が正法伝道の決意をされた時の偈にのたまわく、

「彼らのために、甘露の門は開かれた。耳ある者は聞くがよい。先入の見を捨ててがよ

い。」(増谷文雄先生訳)

と。そしてハラナ国の鹿野苑に行つて五比丘を、ついでその国の長者の子耶舎^{ヤサ}を濟度された。彼らは一様に「遠塵離垢の法眼淨」なるを得た。耶舎の父も亦釈尊に値遇し、正しき法の眼を与えられ、「この師の教えを措いて、又他に依るところなし。」と思ひ定めて在家の信者の第一号となつた。古い經典に曰く、

「妙なるかな、世尊、妙なるかな世尊。例えば倒れたるものを起こすが如く、覆われたるものを現すが如く、迷える者に道を教うるが如く、闇黒の中に燈火をかかげて、眼ある者は見よと言うが如く、世尊は様々な方便をもつて、法を顯示し給うた。私はここに世尊と法と比丘衆とに歸依し奉る。世尊よ、願わくば、私を在家の信者として容^{ゆる}し給え。」（同先生訳）と。

このようにして初転法輪（最初の説法）より釈尊を入れて六人、更に七人、十一人、六十一人、一千二百五十人となり、三万二千となつて在家信者と共に教団が爆発的に發展していったのである。

私共も釈尊及び弁榮聖者の芳躅を慕ひ、「為^レ法、不^レ為^レ身」に如教奉行したく、その一端として茲に光友有志と共に、『光明主義玄義』ワイド版を出版することにした。この地上

における第一番目の在家信者となった耶舎の父の告白の如く、世紀末の闇夜にさ迷う我ら衆生を照らす二灯一光となるよう、至心に祈念し奉る。

平成七年八月廿日

杉田善孝

和南

平成七年八月二十日発行

義玄主義光明

(増訂版ワイド)

著者

仏陀禪那 弁栄聖者

校註者

杉田善孝

発行者

光明会本部教学部

印刷所

東進印刷工業株式会社

発行所

千六五九

芦屋市六麓荘町二〇一二〇

側〇一一一〇一一七六〇一

光明会本部教学部

電話(〇七九七)二二一四九〇一

落丁・乱丁本はお取替致します。